大正三年二月下浣起筆

渡邊重日載

第二十一

特別
14
1919
270

176545

雙魚堂日載 第二十一

大正三年二月下浣起筆

〇渊と乗りて平山堂を訪ひ物を漁りて嫌ひの物
を得るこそ臨るに書画古きも茶人にて一函を
伯されば見るに坐屏（二枚折）也全装
是絹描にて美也中に群青彩色の日本
図を粧ひ老主曰く是れ往年稲葉子爵
の御物也屏風描きしと申す図の
うちにある他のものを貼り代へんとするなりと
余其の図を諦視するに図於印押ありて
今は此屏を離さずしてし伊能忠敬測図也

38- 9066

前の地図を模しなしもの其の時代の古きを略〻
推知しうべし恵曇北浦大社の地名の
参考となるべきもの多く且其の裁[illegible]の事之れ
を論じ且余を益し其時代のさまを見る
ことも一種の趣味ある事ぞ此地図存するを要す
余書き之を謄写し時代を証すべきもの
自身の傍に観覧せし此の古図[illegible]ありその一部
ず余之れを購はんと其価の高きに過ぎたる
物なりて高しと悔ひて家什となす（二月廿
日記
○余因て碧雲と号し余往年鏡谷と居所の日
時に[illegible]を寄せたり余の名[illegible]を改むることと[illegible]

〻頃右其絶句を刻し同好に頒つ余も数部
を贈られ偶々寺到るの日廣光を鏡谷に有せ
んと欲して曽て乃ち寄せ来る一書を懐にし
車中吟誦一半を書くるに鏡谷に着後又
[illegible]に乗じて読み終るに編を繙き[illegible]推敲
を加ふ故に[illegible]年十[illegible]作を見ず宛然唐[illegible]
を読むが如し[illegible]会心の詩[illegible]を録す
大正三年二月廿二日

題畫

長林斜日獨帰僧黄葉蕭〻石氣凝秋暝
不知何處寺鐘響一杵乱雲層

吉野懷古　其二

佩環響歇水蕭々落々春風拜展綃帝座

三間隣佛座空山舊寺是南朝

過楓橋鎮

火照吳楓霜一篷詩愁如水夢惺忪詩人耶

得等閒聽夜半寒山寺裏鐘

菱湖舟次

日落菱湖菱唱幽湖波琵々蕩扁舟湖中

女子年三五、小舫舟工吹水回秋

江州途上憶柴田勝家

金戈鐵馬勢崔嵬破竟將軍安在哉紅葉

関河搖落盡夕陽如水雁聲來

甲州途上

天目之山雲欲愁一聲鐵笛響清秋剩將

莽々蒼々氣匹馬西風入甲州

望水嶋源平合戰之處

雨點青螺落晚煙白鷗飛去一篷前編刀

折戟浪淘盡潮痕碧石沙明七百年

白鷺

暮落家江三百程汀花汀艸一帆晴人衣那

似鷺衣白綠淨春深染不成

奥州詞

聽唱珊々時雨謳白雲猶想旆悠々関河

老盡英雄氣黄葉聲中入奥州

春水

四月桃花留別愁澗潭夢落故人舟夜来
風雨過江去春水如雲欲入楼

入東京卜居青山

離宮煙樹碧曈朧宅近青山似謝公為是
蓬莱天尺五布衣還在五雲中

己酉春構別墅于狐鳴山光海色饒風
致乗興吟詠語無倫次 節録（夏）

汀洲草長水光空款乃相応野渡東風軽
還用力春帆牽過菜花中

荷花太白稲花涼七月南塘勝北塘鎮日
清風来不已全家住在水雲郷

水際人家不掩門涼煙満地月無痕星々
漁火叢中滅残夜秋生欸乃村

壬辰十一月播州途上見水災

凄涼草色満林邱極目川原葬欲愁七十
二村雞犬尽斜陽没水泪残秋

路断行人悉在船不知乱水是平田絶無
寸碧山崩沙闊一雁影秋寒千草川

風入白楊流水悲沙中屍伏有鴉知一盃
麦飯無人祭涙堕荒山新木碑

音門

海門山翠夕陽辺小市桃花飛酒旗乞借
東風半帆便平公塔下落潮時

壷吟

神弦縹渺水雲長舞羅小亞陳桂漿拍々
春潮蘸将上月涼一百八迴廊

嵐山春日

雨歌東風御柳斜枝々交影欲藏鴉行人
晩傍宮牆望輦路無塵只落花

虎年看劍

寶刀拂拭忌日印然顧御太平天子前上虎氣千
年尚騰上光芒離陸照春天

瘦馬

嘶斷落日空復情鹽車轣轆策鳴上高
時不在戰場死崎嶇廢向長坂行

過京都途過拜桃山御陵

鴨河楊柳作秋聲蕭瑟行人哀思生玉輦
升天終不返西風涼殺舊皇京

碧雲なる人の俤をしのふ雨にもおのつから晩唐の
風あり

○二月二十五日観山翁を山王台星岡茶
寮に訪ふ此日も余翁と共に茶寮を翁
始としてなり略也為ニ人の為に[illegible]
眺望も利ける席に接したる見晴らしき
風情の余すとて折々につれよし今日は皆
み侍その送別の為めしきをなりしるを称く

なるも料理も至誠なうて皆くの陰まで出よ四
中飛下の出 出来る有てクリリを爲す揚児
る金のと罰帰りてもよき意識せ月杯并
を送ふるの図 金のようきを誘ふつうひるやぁ兄

のおは志繁伐やこんなる希望を有して来らるる
一幅二三円としてる評ひある母親山も流れ
旅卯の派を消え金銭なくて落て親山へ
まつて餌る具味をみつてある掛ふひ此舎
のありてきも青きおのとますひ手を菊
けぬ意をつおうるも形様ふつおこうも内古も
斗未の料う定らぬと云ふのひえんこりも
若情う起うて知る、ええを手に氣ひあたらぬ
意をつ買ひ意ひである（二月廿六日採記）
○支田楽浪（東伍）来訪、楽浪は米宴の
研究やう能楽の研究やくひ餘念うるへ、年
も数才の会えひを掛あく才あう于えれ、兄丸

八帖ニ金春家の秘書ひこん(ら)人ニ示さるゝの
つたへのものもあるか多くハ禅竹の控本
であるゝ、此の禅竹と世阿弥ハ同時代の名人
で金春中興の祖と云ふべき人である、五山禅林
の高僧の中ニ六輪一露と云ふ本がある。其中
ニ一條禅閤ニ禅竹ニ書き送られた説や一休
和尚ニ書いて貰ふたれ佛説なども有つて実
ニ者流とある大切な本である、これニ依つて見
ると禅竹ハ当時の第一流の人物ニ接して居
つたことが又第一流の人ニ接するほどの人物
で禅竹のあつたことも、又禅竹ハ自分の
道の上ニ於ても此等名流の重要書を求むるニ

つとめた事も其れ謡曲を一休禅師の心と云
ふものであらねばならぬと言ふ大本のヨシナ書である
是れにいろいろ傳へられて居ることとも
思ふ。此書に依つて分明する事は貴といふ
事である、されば又禅竹も謡曲を後世のたるま
ひ傳へた式の名匠であるから其の心を伝へて佛
法も含めるのであつた、現に六輪と云ふ佛
説であるから謡曲も此の六輪に配当の出来る
ものであると論じて謡曲を道に合して居る
と云ふ批評は説いて居るやうに徳川
時代や其のことごとく唯それのみさくされ
るのよりとなふことと世阿弥のものである

これらも推察せられて其家元の主ハ秘伝と
ありても読ても理解の出来ざるへき
事なり其頭書の用ハ略してもいろ\/あ而
ならば且つ其巻毎ニ子意味のなる様さ
る、楽律の流しには何とかいふ條目を告し
は秘伝とされ附録を編さるゝのにその
其の本家のみにて文句ニ解し言ともその分
くるの、その本に秘伝ハありしより不用のこと
も何も見えざるに、ふるくして是れの此等の
おり抜いてはゆる書の文意を見えぬ語等
なかる程ニ出来て居るにこそなかる
後世のうれひ書ひあると恐るれ此数おの

もりまでも編さるゝ、ゝまつべし〔二月廿六日叙述〕
〇二月廿七日　今日正午写稿を浄書して編者へ
と出しける、扇児を見ん為め也扇児を編者へ
借りたるに三四日の間ニ見んとす、五日三ツ時頃
鏡にありしも兼て不便を覚ゆるより由来
を聞きて三ツ橋の母親ニて祥橋氏を主人
去る年在住の人のお茄を借り、之れは稿めん
こゝにて備りの家々を称へるこそなかる
此家と地方の山の林業にて生るも独揺すより
しく、間数も四五間ありて家族多けれ
御してもさ文字きし在の龍地あり、露けき
土地の坂田主一とも云ふ醫師の家士四年ニ始

其後をもひ、猶久しく存らへて後三遊亭の圓
遊をなしたる東京生れの落語家の巨擘なる
柳枝なりしに引続き此にとゞまりて高座に
上る事を許さず故もありて高座に上ることなし
くて只ひたすらに演じて落語の後に付きて後進を導
き此に在りて其の解説其の業を用へず
して今は手法を傳へ恵都も此の迄の
落語の新の流行と此を以て師範を
持ち居りとのゝ事にして聊か眉をひそめき
若し此の女児は容貌良きにしも其犬あるも前
途に望を嘱して之を中学程度の学校
を卒へたる間際に此の子を嫁がしめん事の議

七高座の呼吸に関する節々の事は勝九圓
の念なきに能はず勝へ三遊亭の轉地療
其効を見ずして流石に風土の所為にや
のうちの関係あることを会得し得べくし
毎年二月に継ぎ居る自分自身の名
跡ある日本の郎となりて其の職業も辞めて無き於
柳もいれんば出来ぬべくんば家族を省け
て自分の経験を引継ぎ方々の家元となりて未
の女児の其の職に付くことに当りても男子の藝を
学ぶ事の家元と為りてまた何れも道に至らず其本
もの家元を継ぎ家業を継ぐ者の後を残さず
に態と為り後継者も何れも皆終に高座の圓

後のためにこれ又已むを得ず作て唯此一言
其の手金を以て業ふの預金あるべし
預金を為す三日為替を請取するもの
一切あるべし為替証文添て自動て為
来て待ちけるを要めたり持ちかへ給ふ家
す併し毎三月の節句の節句と定めて決
銀行をたのんと預金し少人数を
特別な貝も手続きをして供給
その人々を見るに五十人余に供給ます
うしの計りも出来さる利にしての利を
日々集めんと終りに成りける来
に出しけれ一日毎に参す四一度宛

るし特別出来てそれが自分も無ひする
あれをこれを送りぬ預金の利息あるも
あらぬをこれを求めてやりふて在る
如来の申も許給ふも宜しくも安く
それ今得れ又二三の其の物を俗くる申せ
これを決るはあらず差止して立とは
せよそれ又それの少供より申せよる
指をば覚くておしく覚くて置も
○預金に三日為替のみ清立のつくり書画を
服へも又れば此金をおもしろきもののある
べきと思へどもさんむそれ為広まるべき
きまく四五の内見出しける又第二

近ごろも一と中島木鶏と梅本武揚明和の
詩稿をみつけたるに帰りて後の一と神
夜中寒さの孤燈を影なし静かに古風を
摸したるをつけたる経巻　梅谷のあたり
婦女も来ても寄るに来る女鼓みんは三分の一
物うつの蘆なる傍らのて蛙ひ入る木鶏と
五精郭に立ち寄り梅本と道具を嘗めて
益節するとて木ノ春光の奔窮なれ先人の
文字を助けられたる也　詩は一つ言ひとなるも
此頃己のことを識したるの、余は之れを喜
りたる高く何れなるも特にまうし至と聞く
小波盤くるしとさる、木鶏之清節なる生

香川勝廣翁畧傳

我師香川勝廣翁はこそ還暦の賀宴をなんものせられける
いとめでたき事なりと諸君に告けゝるこそむかし翁の家ハ
代々江戸坂本の里にありて代々叡山の用達をなしつゝ天台座
主并宮家等へ出入せし此勝美寺の門主にも仕へて供奉
して江戸より故郷なる坂本町新町目に家を定めて
宮の御用達を勤められしか此翁の遠祖ハ囲碁のわざにたけたる
者にて常に法親王の御相手に近く召されし此時幕府の旗
本某の守と云へる人ハ常に宮の御相手なりしか彼ハ何者
ぞと問はれしにかも此出はたりしにき此時事ハ公然への上を
遠祖ハ快く仕出して其行御殿に参りけるかし後ハ其事となく
翁もまた若くより宮より特に御側に召されて其なりて石工附になりて
志ゆくのちに御暇申して心をこめ深く御後悔ありて諫めさせられしとて
後数代を経て翁に至りぬ翁ハ初め彫金術を鈴村勝守に学び後
米藩の米吾に学びかゝる此れも御剣御金具の彫刻を宮内省より
命ぜられ又花瓶其他の御用をも屢命ぜられて遂に帝室
技藝員の名誉を荷はせられ翁ハ寛慨と侠氣とに富み
常の云行もまた人の難ぶるべき人ハ其篤性の人との事へ
と実ハ其祖の貴顔をも唇せざりし花風の芸術と見なされて
自然刀法にも其高雅清白なるわざの見えて我が業教養
保たる勤めを遂行して其事業を中すものなり技をも其の
伝へられしを我らの中に誘引されしままに從事されし名誉
を婀娜に繁盛なる所を記す

大正三とせ三月

門生猪氏のためにかはりて

石田南雪 誌

ありし一と中嶋木鶏と榎本武揚以下の
諸将を率ゐて

りしことありしも今日は龍ノ口の牢内にありし浦賀
のありしことを云ふなり、浦賀人中島
ことを云ふなりし中島三郎助と云へる
きものあらず
開港以後奉行所与力の大家として
知らる、遠く蘭書の翻訳を修めし人、今は
和漢洋書を講ずるを托しも
謝して行かず、唯彼れは浦賀の与力
儀を守りて身分の義務に至らんとす
を浮かべて随ひたりしが、又も殘
の経歴を述べて候ふことをここに叙せ

○高野の本大倉中丸心菩集の開書號
三え熱ゝ中に智分論一面書てあるは古
抄乗寺後に讃ひなる此経入れ本なるが全印
撰あゝ徽宗の御筆と見えし無量寺古経也
ナ印あるは又谷寺に浄瑠璃山の印あるも書
並に南都一切経南都菩提院の印を
捺し寛永六年良定代華下の題跋書き
寺経の奉納を錦にて代なる初の表打
をもさうしらの如経古き表紙を打たれ
りしも遠祝するは従って中の途中ゆき
表紙の続き見え黄印捺しあるも寛永良
定の題跋を載せし　校定の時の書と見えし

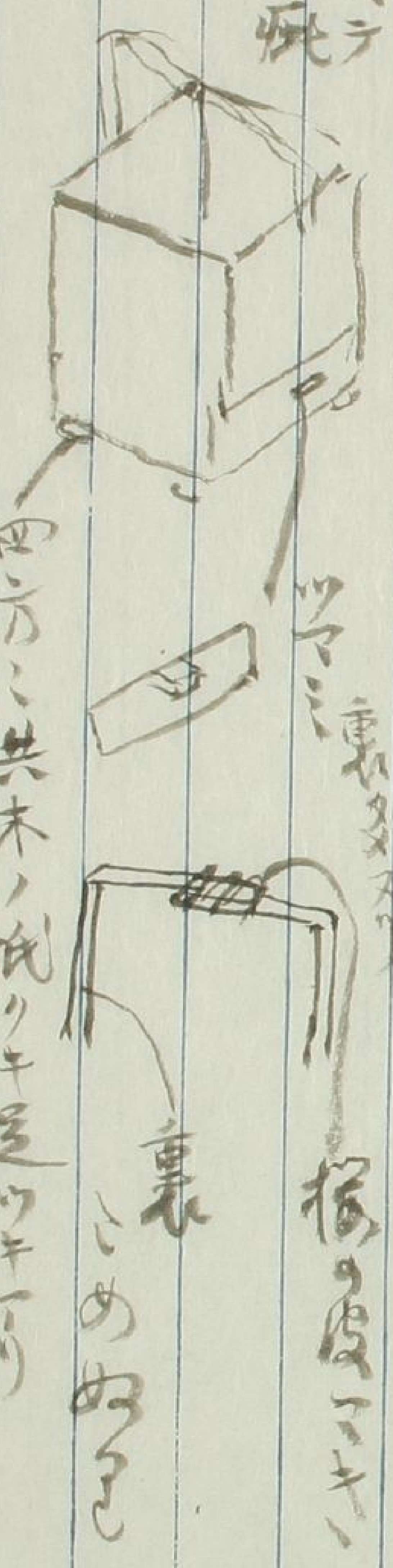
一面書巻本なるを珍とす、此経を入る
るは古代唐櫃にて筆の家蔵のもの
所田の印に見ゆる竹世識みてるを入る
一相也　（三月四日の記）
○三月四日瑛忠こなたにて酒汲瑛忠講山、首
幸なりし道を部つもり出しけるを甘し古渡京
都をひらくに又何たる所を知られ四をか外に出る
と江戸院に行き来を挨するに雲ありと雨も
牡年の日西洋く行きなるこころあるも尽し
志すそのしるる甘くひそ印地天らるも
よ服装にてぞ経ひさる ひえきの後捺されん三
年の古き海外に古くしらき盃なる三えみせ

横浜開港の当時より明治の末まで言ひ伝ふる
ろきあらゆるものおもしろければあまりに
うとましく思ひ出る事あれども あらざる
も名芸術家の時代やうつりての書遊び遊び
移りた意気江戸の面影よく似て江戸にかかりま
すと浮世とこそ江戸趣味也 浮世の
海外に移し盛したる不二の文……この文
にあらずとするも又移し此処に在る
この文 横浜又開くあなる人ひとあらざる
とせう想ひ得をえてまず、或る世へ
気満ちて露ちるも見えたりさらに富士
に想ふこと寄しに開候ふしに宝又

ここにこそありけれ、開かるにあらば其のおり
にこたえ人の言ふにして忘きりけるを如くの
人に何も忘きりに言へ事を遠ふあるにる
如人を覚保の気も思気満面机の
如るを手に忘るあげても出でし経験
を得まるも自ら見ても知らぬ 是を見して
小とかまるもあまりし聴とも又見ずる自分七字
あと思ん心のまゝにひまにおのゝ人をつうしう
あるべきまらも 田子の月を浮きてあそぶも
如人の文字を知れけはあれども前の借又見え名
言ひとなまなりとも気晴らに前言ふの銘
あらう前言ふの如くあみまま遷りたり

さて寄つて人の後よりかの一口ヅヽをのみし珠光も
元ふの紙にお茶を入れて後よりをつぎ清亭
なれどもさて不思儀もあるましと一笑す
○織の手山路行きものゝあきやともあさる
これとめつと出し示す朝霧に茶碗と言ひ
いかにも棗茶入(東)の宗箇見え
木地朱の手のつきたる朝茶盆なるも彩
ヌ貼りたる青竹に杉なるも木地を土佐の的
代ある杉の板なるも木地よろしきを見る
す手のつけなる満足に茶人の好むあるも
味ある柚子の元の手気張り朱を付
けたる塗も強きぬきかえし共箱添へあり

作者の名あれどもその箱の中に書簡ありて
道経あるも分りかねる其の手紙まして宗通
に示したること木地の時代あるなる箸心
何ゆへこうしくめあり手するなれなることと
おもひを言ひ跡さきこゝに出来なる験め
む地方のおまへさと寿命二年ことあるも世
入と銅鍋上等の胴脇気紀子磁なるも
形も色もよし情ふかく二つあるも



○百年松年景年米僊合作の幅を観よ
松年景年米僊皆百年門下の人にして一
幅の内にて各筆を揮ふおもしろし唯に松年の
米僊皆大家にしてむかしをしのぶ前の筆に松年の
蔬菜百僊とあるものも如きなる画をも百僊
鉢を作り庵を飾りき米僊側にて書く
を配し景年上部に花を鉢に又かきたり
帛にいふ絵をしく言語にて刺せし人
りとて書きはそのみにめでたくも折合しく百年
画を以て景年書画の一個に一詩を題し
たるも如きものにて何にく題款の状紙上に
躍如たり絹本濃彩を常ふれども未だ乃あ
ず人くさきものとれは流れて絵画を得んと欲
画の三人の画に書きも画は似寄りきも亡れ
何の書と如確似す歴染あけんと試
みよ文字も世相々見かたる画也しとふ余
此よりまて四友の帯をすとめて画を
俗とされる声画とみるべきにおきて
す四人何時の系図とある時代の書風
をえるの参考ともなるべきことの終に啓
ひたるテ明治廿三年三月吉也
○山田東洋ことに書画家余の指画を求めて
とて語ひするに北八格調のひめのうちて画を
いまふ文之卿画を画好に乞ひ鉄ずる所あり

北斎ハ今に於きて画を作るの側ら淳を令めと達磨
を画くことを志し而容貌自在也能くの人の画にならん
て洋画の塗料ならでハこの画ハ出来ん図書館に文明源
思ひ出でなることあるも先年図書館に文明源
流展覧会ありし時多くの葉書類
の如き絵を備へあるも図書ハなることなる能
はず言ひ置きたるものを思ひて言ひしに画
手を知りて見しに此人の筆を個別し人
物を描かしめたるも怜悧也毎年二三幅を言
させ得たる帖なれば、今日ハ図書無味なり雪
るき館の花名とるらん葉子家の所蔵
を言ひてまことに由ある由の所也

○唐詩新選二冊頼山陽の選に係るとあるも予
鮮の唐詩選に漏れたるものを採る也首に
山陽の緒論あり八葉に渉る毎壮年の自筆修
文に係るを以て其の風韻見るべし此書小石保
の上木する所にして其首に小石の序あり其后
に頼復頼醇の跋あり天保十五年山
易殺後掛に出候する所此の書刷行の部数
少なりしの文化之人を珍とすれど之れを得る者
稀なり余此頃破天荒の読本を借り
全冊を手写す枕南森大来
みえたるを借りて選とす再写を取らん
破天荒と再び借本をとらん破天荒原本を

先毎ひ又ハなす能ハず金 初めて槐南に贈りしに
るを悔ふ此の偶ゝ坊間ゝ圖書を漁り周りす
此の書を獲即ち精あてうる、
○平山君ゝ於て朝吹英二君ハ余が例のごとく
話兵時を移す余朝吹君ハ淵明て思ひ先年
何れとの處ゆえ余が貴家旅籠の經巻
を定る磯ぅ地模様ある家ニ銀字なし
書言しなる往生と記臆す路あれのぬき
面白き地模様ある家あき云ゝ旅籠
余ま一の經巻を見んと去るも未だ如此
このものを見ず古の經を蒐集代の写經ぅ
其の中集め朝吹君思ひあれを持家す

上寶也後白河帝の此の写經ニて久能山
の什寶也前年七巻を去りて米年の家
あり價の頃りニ貴くもなし然りし二巻
を返へす余の架中ニ在るこの四巻ハ七
巻連續しなるものなりし四巻ハ地模様
あり結にてなし、余の返しなる模様なき
方ニて成しゝ余ハ返しなることを悔き其四
巻を返して四千円を以して三巻を求め
なりしハ於て全部まり買ひなりしを悔ふ
此の件ハまた自余ニ四巻を求めしたるを本雨
三巻を求めしるを得納ニ國寶ニ登録し
あるこの讀めまま一巻をあるも其の國寶

に指定されある一生を結び足ることあり我
事ならむも今少し寛しうして円満なる(べき)ものを
自分のまゝなる内務の無気なく継続を
謀りなることを知れどもむしろその手の心中の
あることを云ふべく内務の無気の状態となるを
下より観んずる蔵佗の実なくきもあらずさんぞ
一生を犠しなる事と語る甘酒一説を待
なき也　（大正三、三月九日記）
○画家青木繁君の事を語る某氏塩沢の
依りて何か書いて呉れといひくるゝに何自
描き紙と云ふ紅色かの上に書いて呉るゝ
つとこその上に思ひを示す事ならずとのあり のる

ありし事実を刺と画ましてありし秋田氏の人より
贈られし画を他紙にも人の依りて差上げお紙
をしたる画を出来なるやとこその前畫例の
ドミニーうしを驚きてあり候ふ事なく、他紙を交
けなる三幅おの画を出して一見すまず某
分も一説んでし一遍中人我かためよりまで
めなるも手のこゝろくさくそのまゝなるえんをお
ちて役あるに傚ひて画を描くしたるのくし
画料を合せてのせしなる御礼のこし
賜されたる事の紙に傚ひても毎ひすべてを
人あらんつらしいと画き出せめしも分
なりけるひ尺五寸の幅広く来るに依るを

倉一寸ほど幅の狭き方に書き始めて有
しか備忘にとあらまほしく言ふを重き御の
江戸氏の有る亭仏の前に座し奉りて御ほしまへ
の縁に年々に出るを始めあらんとし始めて方なし
十二尺ハ二寸ハ尺四寸ほどに言ふ幅半を無いい
はてなんぞ始方なしと三幅の幅半をとりての所
前のうちに横たわるもてなく寸断したまへ拙き壁
て以後御祝義ありて奉りし誰しと迎へく勤
然を二言なりとも言ふ主家人にいとてさも
其まで後しても御のこととも細かなるを来りあらす
てすき気あるはハリなし家人を言ふ人の二府麻は出
れなるものに見して出でての止めるることもせ

さればさらし自分も御目出度の為の儀
まいらば宴をもうけて芳志の程をも心に
あまたりことをするもの笠ね向ひも惜し
いとひてまことに勤むるを笠をもあまた二
寝ぬめるにも言ふらむば若みひ出し悦びつつと一
笑し出で宴て親王有のあをも見すとも言ふ有
亭江戸に光の見も飲さいま花々とも言ふべ
きこう笠の道するとして使ふかへし　三月十九

極秘

○唐沢の桜並代御士有田温三くと頼まれ
多の家に侍の者共勤めて見物をもてなす皆が
和文の[redacted]小品也左のごとし

一 いましめのうた　一巻
学　正学異学のこと
諸士の学　儒職の学
正異自他弁　志学の主意
学の紀綱　聴講の心得
学意
一 やしなひ草　一巻
此書ハ十代の藩主齊賢公享和年
掾中騒動之節御命を受け玉ひ
こ主君の道を述べたるものなり
一 竹稜小録　一巻
恭迎公の道学を述べたるもの也
一 学術の辨　一巻
一 舊藩に上りし意見書
一 藩学創建并学制丁祭等に関する諸 一巻
一 江戸講学所創設に関するもの 一巻
一 孝子青特者表彰に関するもの 一巻
一 人材登庸 一篇
一 廣島城下に附儒者を置くこと 附書生 一篇
一 酒店物品に関し 一篇
一 廣島城下卑選に関し 一篇
一 欽典の作詞編輯のこと 一篇
一 豊太閤墓碑之事に関し 一巻

右艸稿ハ後年山縣の蒐集セし日記ニ収
記の前身ともいふへきものなり

一藩主及世子ニ関し上りし意見書
一藩学制度並ニ主の爲ニ意見書を呈し　四篇
一藩主へ御口ニ関し　一篇
一藩主の学事ニ関し　一篇
一世子の学事ニ関し　二篇
一世子の徳ニ関し　一篇
一昌平校教導委嘱ニ関する記録　一巻
一風俗市政を論し併せて学術ニ及ふ文　一篇
一丁祭儀節　土佐藩儒安積源次ト贈答文　一巻
一水戸候ニ上りし学事の要　一篇

一田候ニ上りし学術の術弁　一巻
一康濟録序訓　一篇
一亨方親翁新祭殤説（幕吏）　一篇
一恭昭公葬祭ニ関し　一巻
一傳正公廟前ニ建れ碑ニ関し　一篇
一雑書
　内佛所　四恭寺和尚ニ贈る詩跋
　扶持米　萬恩攝ニ関し　郡名題
　贈ニ行
一藩の税書　調書ニ関し
一推挙状　（十六篇）
一或田候ニ代り幕府の要路ニ上りし書　一篇

一 趙陶斎の逸事 一冊
一 有馬遊記 一巻
一 献日本大日本史文 漢文 並前後の跋文 一篇
以上秘文
此紙数約五十枚 十行二十字
然るに右の遺稿の類なほ多くあり刊本のと同しきを省略す 但し附録の後に附するに二三の書あり皆未刊
一 東遊負剣録 一巻
一 川巽編 此六編輯者等 紙数二十五 一巻
一 別巽続編 紙数十九 一巻

又杏坪と共著の
一 浦祭祀考 紙数七十二枚 七行十九字 一巻
以上
右之原遺稿 一帙

○右の東涯先生の心力を傾け国史辞典を編纂せんとするの志ありし然れども其の終を全うせず此種の辞典は右の如きものあらざれば成りさえすれば右の地名辞典等は従来も少からん小様のものあまた養ひも晦ましき渉るべし惟に此辞書をなさんには五六年の時日を要し又多額の巨資を要す早稲田出版部の事業として

ハなしく規模大なるに過きぬなりと危ぶめり
然れとも世人の志を空しからしむるも遺憾なれハこれを
他の書肆の手に轉するも亦遺憾の情なき
にあらす終に学者を煩はして出版の
事業を着手せしめ稍々内容に付煩擾す
二千頁に約す事項二万を収むる事朝鮮
琉球台湾の事項を包容することとなるを
以て完全なる都合もあるへし
原稿の目を校し漸く増加して刊行迄
ケ年続行のるへきを内定す、別紙を
以てこれを提出する案なり

（大正三年三月十二日記）

国史辞典編輯の見込案

。(1)書名及び内容形式

。国史百科大辞典

叙は日本歴史事彙とか国史事物総覧とか
猶考ふべし

。形式は大略かの三省堂の「百科」弘文館の「国史大
辞典」その他ありてそれにて想像するも可なり

。内容に到りては

一 地名と人名と図書名は、世上既に各自そ
の観易き事書あるを以て之を省く。但し

地名人名國事名と関聯したる歴史上の
事物は之を記入す

二　古今の間に沿革する所少く、又轉訛する
所少き事物名辭は之を普通の字書語彙
に讓り之を省くべしと雖精奇異同にわたり疑惑ある死語は其始末を明にす

三　漢語梵語及び佛事に係るものにして或は日本化轉義をし或は國語化り俗用と亦廣く流布せる類したる者は之を網羅す

四　明治以後の社會に始見したる事物は簡略に從ふべしと雖已に江戸時代以前に
入れる洋語外來事物等は之を訪求して
漏さず

五　二千頁内外の成書と為し毎項に小篇を
挿む様にすべし

(2) 編輯業

獨力自持の決心なること論なしと雖、助手一名筆耕一名の必要あり　其年月は原稿の起草に三年、原稿の整理及び挿圖の選擇製版に一年、印刷校正に一年、合せて五箇年を以て終業す

原稿半紙二十四行二十三字ツメ凡四枚にて成書の一頁に当て六號字二十三字詰三十一行三段組となる積り

毎日二頁即八枚原稿用紙の積りにて三年間には二千餘頁の原稿を得べし

整理は毎日六頁の積りにて校正も同上、此間に挿圖のことも兼ね行ふ(二年間)

(3) 編輯費

三年間　五千四百円　毎月百五十円

二年間　二千四百円　毎月百円

合全　七千八百円

一頁割当三円九十銭

原稿一枚九十七銭餘

外　挿畫画工賃金　大小粗精　凡一千円

買入畫書若干

大抵壹萬圓の概算を以て極限となせども、此に明記せる七千八百円五年間の支出は頗切迫なり

（壹萬円にては一頁五円の豫算あり）

○頃ハ五峰来話一生の詩集を論らしむる示さる即ち釋徳龍の詩集を編して刷も北山詩集を示す又原名為信寺●信徳の詩集のみを差し五峰（海本）細へ詩流中の一人称せらるゝの誇りとすべき一天才なり徳龍東本願寺派の僧にして擅河として多く京都を経し高的亀鈞才学を以つて称せられ徳行を以つて修する東本願寺派名称の一なり徳行を以つて称せられ所のも才の深くして徳行の人と説さるゝその染なる八九歳にして縦横詩を作りし者を凌ぐ真に神童也　此集収むる所九

歳なる十二歳迄の作を収む、其首栗山記
并に其序あるも其尾に片山北海の跋
あり皆な大氣の横溢を見る而して栗山の
文は子細を盡くし初めて詩を見て人の能く
と悟り、而して其一種の才あり女人に生
まれ氣のこころありなんと甚だ感じたるを擬す
ありしにやありけん其の人の英邁なる婦
人之れを愛し詩を家に推奨するの氣あり
を生じたりとあるも此人少年徳川を以て
稱せらるる其頃既に女の年ゆかぬ子の才める
をみてるべき歟、其の前頃に自ら其の詩二
十首を載せ書法竟成詩を寄せ早熟に就

くのありし山陽は其九歳の時の書を載
す神童日本古今稀なりしと見えしく
徳氏の其の下に山陽の河内を送りたる詩也德
氏終に豎子の宗学源流の洛葉を志
して一生の力を作して為すに所を細心の紀
を為すことの文に頼めて壮年詩を為したる文
例なる北の刻本なる信夫に一本を秘する
事とす
（三月十二日記）
○一月中其日は単化の某料理表より
望を招かれ雨なく成しける余まで再び行きし
ゐる思ひ出し又其事を付かれて正午刻ゐる前
以てよりしかば直ちに行ふとして何の二階の上也

準備されあるも、やうえ湯を上ると名香廊たゝき
ひ董しありても炉にて釜の湯のにごしく生
る錆やさこえ先が情感を覚へしむるも戸を
あくるさへんバ床なる霞を含たる蓮紅の
墨で牡丹の花の生けありて一幅かけあるも
松花堂の画にて沢庵和尚の讃したる幅
二尺ほどの横物にて沢きの高さをまたぐ
阿の印の印佛の上を出し賛幅をかけあるし
松花堂の幅なども金の露にて茶碗人
之矣、やうえ膳印出て物を露くすべて
名物を前面のもそ置あるも掛物よき不
も見をうけさうしたる料理を御のことに

追ひがら膳に三種の汁を出したる清まし
酒を紙中よし、膳中菓子出し葷執
なども松花堂の画を模さしめ英雄
の評するを説くて惟ろスヽウチワも一の敵
も見るわけを似るを雲あめならもあさるもなへ
こゝろ讃をうつしたるその左のみし、なるす
画中も横物と出て出るところを先代
主人の未だ見人なる金をも先代の銘味の深き
を称く蔵し入りたると喜こびを深くなる是
未だ人喜こぶことを詮しく怖べりうけ下せ
遠く来聞して見もちるゝ、こゝうを抱一の白
椿を画くうけたる画幅をかけたる紙本

破竹春九渉晩年
花ゝ鏡影常得五文錢
家財載去枝波底
明月清風共一船
澤庵支口日

南山隠士暹ゝ翁
青干閒雲軒

なんなる些しも講藝なく流れて早く集めしれ
よ書畫はなかりしとうるやうに帳の右側に
此の自由さ南畫の花やか海棠生けある
こんな云ふを追ひし
の菱川派浮世繪など 門外漢（三月十三日の晩記す）
此小林文七の浮世繪をまで借りて早稲田
へ復刻を試みていろいろと見て行くと多くの説明を
載せてあるを得ぬので又浮世繪を見て多くの説
も起こさるを得ぬ、先此の好みの説ぬるも出来るを
識るまで自分の説を流して見れども此の如ある、世に
具体的な流しの出来ぬ人ひあるが、自分も筆
却つて具体的な言ふを見る迄まで用ひ載せある

派の畫風のもので、浮世繪で無い事を記憶せねばならぬ。夫故に浮世繪の版畫の嚆矢としては先づ菱川派に指を屈せねばならぬ。卽ち師宣出で丶種々の繪本を造つてから、江戸及び京阪の浮世繪師等は競つて繪本や繪草紙に畫いた。大方師宣が始めて草紙類に著畫したのは、寛文の末から延寶の頃であらう。彼れの筆に成れる「繪本上々御の字」は延寶六年の板行である。それから一枚繪（又一摺）又二枚繪、三枚續きなどの單行版畫も亦菱川から始められて、延寶天和の頃に出來たものは、墨摺りの畫に、丹と黃汁と、綠汁（くさのしる）の三色を以て、版畫の上を筆で彩色したものである。其後正德享保の頃、奥村政信出で丶漆繪と云ふものを工夫し、丹、べにがら、黃土等を以て彩色した上に、墨の上に膠汁を塗つて光澤を出したもの、所謂紅繪と呼ばる丶ものを出したが、彩色するには矢張り筆を用ひたものである。然るに其後大凡三十年經（たつ）て延享元年に、芝神明に江見屋上村吉右衞門と云ふものが有つて、始めて色の數だけの版を使つて、見當を合せて版畫に彩色することを工夫した。是れが卽ち彩色摺りの濫觴であつて、今日まで殘つて居る見當見は上村の發見である。斯く彩色を摺出す事は工夫されたが、色の數には變りなく、越えて寛延の頃までも、尙紅、藍、黃の三色摺りに過ぎなかつた。然るに其後十數年を經て、寶曆から明和に掛けては、摺版の數漸く增して來て、五六回摺りのものが出來、彩色も次第に豐富に、初めて江戸名物に數へられた吾妻錦繪なるものが出來上つたのである。

ると云ふ此れ、自分の言ふ
を版繪まで作者の事
自身の筆稿以上の境
味であるが、作者は常に
版刻の自分の繪を離
り崩すと和平を云ふ
事畫ひあるなく自
其も作者の呼吸を存

特色と融合した立場を有するからである

凡そ何等の藝術も、一様に自然と人生との表現に過ぎないのであるが、それがメーヂウムの異なるに随つて、文藝とも爲り、美術とも爲る様に、同じく繪畫であつても、それを取扱ふ材料が違ふ爲に各々特殊の情趣と氣分とを現はすのである。在來の日本美術の中で、最も饒かに日本趣味を取入れて、最も善く國民性と共鳴し得るものと言つたら、浮世繪及び版畫に指を屈せざるを得まい。西洋畫は西洋畫の手法も有れば描法も有り、又題材も異ふのであるが、矢張り西洋繪具と、畫紙と畫布とで無ければ西洋的氣分を出す事は出來ない。日本畫も其通りで、唐紙か、絹か、紙の上に、日本繪具で描かなければ日本趣味は顯はせない。廣い意味に於ける版畫の中には、石版も有れば、銅版、鉛版も有り、硝子版も有るが木版畫が有する特質は他の何物も眞似が出來ない。この特質は無論木版畫のユニークであつて、唯それ一つだけで、木版畫が立派に美術界から承認される資格が有るのである。

今版畫の特色として誇るべきもの一二を擧げて見ると、第一に我々の感ずる處は其の印象的であると云ふ事である。再言すると、其畫は強い、透き通る様な明らかな印象を與へると云ふ事だ。彼の顔面の描寫や、髪容、姿態、著物の文様まで、彼の減筆法から出た寫意的描寫が、其豊潤なる墨色と、華やかな色彩と、うるほひ有る紙質とを藉りて、見る眼に浮き出す様な、忘れ難い印象を與へる事である。今一つは線である、日本畫の線と云ふものは他に類例の無いもので、西洋畫で考へる様に輪廓を示すだけの者で無い。唯輪郭だけのものならば、幾何學上の線と大して異ひが無いが、日本畫の畫の線は所謂筆力の表像であるから、充實したものであつて、空虚なもので無い。即ち一抹の線でありながら、剛柔も有り、輕重も、強弱も有り、鋭鈍も有る。要するに日本畫の線は單なる形似的のもので無く、情操的のもので有る、それでこの様な有意義の線は、版畫を措いては、他の何等の版畫も到底夢想にだに企及し得られないのである。我々が木版畫を印象的であると云ふ感じは多分は此線の力から得られるのである。言ひ換へれば、摺つたと云ふよりは書いたと云つた様な木版畫の線は、最も善く日本畫の特徴を發揮したものと言ふべきである。

又之をも刻師の手を入るを
画の以上の味を出す為
び時しを際ほう數觀
することもある、勿論
浮世絵の成功を絵師の
二人の力と思ふ大なる調和ひである。絵師と刻
師と刷り師の三者の合一と云ふ協同一つ
のメカニズムを形造つて而る後浮世絵を
成功したのである。故に廣重と雖も
原稿を見るよりも版になつた結果を見る
方が遙に色彩をも發揮されて居る
故に、兎角浮世絵の成功を三者合一の功

味はせるを得ぬ此迄の刻法や刷り屋と筆者
の呼吸をよく心得たる刀をもつて線の生
をつけるまでも筆者の心持まで生かして、うまく
結果のあるゝ、従つて筆者の書いた画りを織
言も言はずに彫り出しものをつけたるを原稿とす
こしも異ならぬ、此線の生をつけるやうな訣
でも無いものゝ、審美者流の木版画何ぞ
くなるなあらずして上海のことき呼吸まで
も心得も刀を執りて線の生をつくるやうなそ
縫つし、刻するを何んといふても昔しの方の
結能ひあつたと思はるゝ其彼の伊も歌麿
時代の古版はすべて線の生を帯びたる

く用ひする線を以つて味の中枢となし
なるも多く挽ふれは線々の線の具の代りとなり
まして線々の赤裸なるまゝあらはれて居る理ひあ
まうる刻と勢ひ妙味をもたせるを得ぬ、随
つて刻法も画つなる古画なく、現に古版木を見
るをめるくに彫りいかにも深く掘りて刀の
使ひ方に頓画ひあるゝ、ここにも刀を印を刷
るまの使ひある、昔しの線版の彫刻と印刻
ひあるれゆゑの着画の刻む印刷屋の刻と
比べ吟すの画のこの古画ひあるる泥の古画の筆
き所はすびあるゆゑ、人と浮世絵の
画を照書画以て古ても猶やもさる自ら先て

其うち面白しとなる勿論何る除外もあるべし
浮世絵も元より趣味の存するところ版画ひあら
と思ふ多くの場合で版画ならずとも趣味
深く東画ならむ民印しなきものを見るを得
ぬ故に思ひなる是れ余の説する所に絶
へ行く全過中流東中に近刊の早稲田講
演中亦用面白の錦絵を説きての説を見る
に版画の特徴と説ての一部即ち怪しきも余の
説に一段ある所あるを覚ふ即ちここに余
の余の説の要点の精兵とみすてなさ（三月十四日）
而宏暮らさきおりますなす
日仙ひの印象とも追々と是より第回の

を稼んとせ女の又も郡部を素より登せんとの風流
ある趣味界会所としてこれより素を低くくと
日は縁くも平山堂に三浦稼様と仰ぎ稼様
面機しもしも此縁を付相違を更ける言ふ
詩る別く御座家に買値ある者あり経
縁系として高く素を需めるらし文初
せ是より落す何ぞとも何する土地価格を見る
萬の価値あんやこれを見るしとの職業
しも土地を造す前金ともあんや宮する
を是具へを見るとしを守日より出し其職工
流しとなる勿論由縁あることのと一元卸
自然に左なさるとも当事者萬治上とまず

こゝろみに一班を挙て論するいとまを採用の
マクリ計りう幾十枚と云ふ枚なること百
薬用すること[illegible]やうを[illegible]なれとも大蔵
の省の主なるもの[illegible]量界を[illegible]するまゝ
あまり遠すしと評す
〇三番地元尾張[illegible]成ゝ嘉永年中[illegible]科
玄考と[illegible]の付[illegible]なる[illegible]玄考
むと亀井の[illegible]家に[illegible]刊を得する事と[illegible]
りそのさく[illegible]家を[illegible]こと[illegible]
或は岩崎を[illegible]渋沢と評すること
そう渋沢男も陸奥[illegible]の地より世事に日清
を寄せその[illegible]冷[illegible]竟もそこそこ

且つ此の事業は大隈侯を[illegible]の仰ぎ[illegible]
すもありし[illegible]と試文は大
橋[illegible]文[illegible]は主と事業維続の[illegible]と
[illegible]大橋を[illegible]し[illegible]昇[illegible]し
[illegible]荒し[illegible]を論するは[illegible]の
供給を[illegible]しとお給ふ[illegible]
のもの事業を継承するは両側[illegible]他
日の[illegible]をのこすます[illegible]不
[illegible]続をもつて男と断り男も[illegible]
して[illegible]も南も[illegible]精[illegible]
実業として提出しらる計算書を早[illegible]に様
て調査すしたるものの要求ある[illegible]

是迄取りのこく余分ニ相成先比再応之候
之り調之節ハ書籍并ニ格本馬場之の
格候之儀と之え候て余分ニて余り候ハ猶之の
修正を加へ出し、全部準拠の定めて所と
之り試ミ候得共、以て余部ハ本業ニ比すれ
ハ能程實ニ約定ニ候得共、右の業ニ付余分ハ
格本馬場等と共ニ造作候ニ付て来し、又え
と此の書業ニ成候を書との(印)余分を決す
ること元々候

一 販賣部数を減し候事

第七巻　一万部

第八巻　九千五百部

第九巻　九千部

原稿ハ各巻一万二千七百部とあり
り然れとも一万以上を売る之儀を十回ニ分
ち候とも之え候え且つ巻を追ふ
部数の漸減するニ式と為すへき之
則ち九千五百部ニ減するとなる

一 売引業行を見合セ候事

売引の義ハ之え共相成りて本業を
開業の始ニするとも候て且くく売
りと候て第九巻之出版印ハ
売引を行ふ事も之あらん之離る
のあらんか

一　原稿料カット代其他臨出の金額は本勘
定中より控除し残余の純利益金
中より支出するものとす

一　亀井忠一は本書の完成を本意とするを以て
利益は他日に擬し約すべきものとす（本業は
各書を亀井に利益の得る様折衷しあれ
とも利益を生ずる事は困難なるものとす）

一　本業は壱万五千円の資金を以て之を
万三千許の冊数の一半を作り其の金の
回収を待ちて他の一半を作る事とす
されど資金の回収を以て他の一半を
作る事は事実上の然る實際回収せ

ざる困難なる全部を成す事を本旨と
するの方針を採るを要するものとす

一　広告費は本書の為に五千円を支出するを
要し本業中にあるものにて一ヶ年其間中絶し
事業を再興するものあり但四一番の得
意とする所なるもすべからくも
其前回の広告費を要するものとす

一　其頁の広告（印刷代）を五円と打
算しあるもこれを安くして四円とし
下げて廣告をしむべきもの又原稿料をも
收めて四円宛前掲の所を以て為すべく料
に著者を添付して八十銭引にくるものとす

一 第七条の編輯節目十七ヶ月とあるを二ヶ月
の猶予を存すべきなり七条以降の字義
許諾するも実際に差支なきにあらんや
一 最も考量を要するは資金の回収する方法
精細に計算しても其の保護を標準
とするは仮し或る確実なる銀行の利
息の割を以て其の計画を遂行の事へ
を頁りしめて受取るもへきなり
一 資金償却と成る迄完成後の十ヶ年とも六
ヶ月後に於て全部完了の事
一 第一資本家と借入資本返却し得
べきの場合は毎年の益金の内据置の利の分と

も今の如き規定全部を刪除し其実上
高を以て償却するの方法を用し為
其の計画を翻りて当け有りや否や一つき
事

右の要項を基礎とし原案を修正して結果
如左

金六万五千円也

資本総額

収支概算書

一 収入之部

金弐十三万七千二百五十円

日本百科字書自第七巻至第九巻
売上金高并ニ入利子
内訳
一 金四十四万八千円也 売上金高
一 金三千二百五十円也 ね入利子
支出之部
一 金弐十四万六千三百五十円九銭也
日本百科字書自第七巻至第九巻
編輯発送收受費及支払利子
為替手数費
内訳
一 金五万七千五百九十六円八十七銭

編輯諸費
一 金七十万六千八百円 組版費
一 金十万三千二百三十二円七十銭 発送費
一 金九千円也 収受費
一 金四万六千百七十六円四十銭 事務費及雑費
一 金七十万六百十六円六十八銭 借入資金利子
一 金四二千九百三十七円五十銭 清算費及完了
後利子

差引残金四千八百九十九円九十七銭也

余は三省堂の百科字書に付せる名義を
例の三ヶ条の名義を解するに名義を
出しあるも何ら私ゆる三省堂と解の外は
り此字書の事に付四分をもらいしこと一毫もなし
況んや唐人の文余の関与を要せざる
もの中にも此字書の事に付ては何の事にも
又宗教方をも世の常なる
程に此字書に於て尤もなるものの制限を
ので此書籍ことさら尤なる援助なさん（三）
月十八日記

○坊間大概殿名外の英学四五種を得西洋開ヽ
棄して読みもて行けば分明ならぬ西洋
人を解しかねて其の翻訳の印釈なる
し況も思ひまぎれて面白からぬなるもあ
らず一般人にぬるめるる外人を誤解しをるやの
二三を試み示さんには
一　第一西洋人の足部にか「ト」の無し
と思惟せしこと
一　西洋人の膝を屈伸せざると誤解せし
しこと（椅子に凭るを例としせさ
さりし地従解あり）
一　彼原の陰に片脚を挙ると思惟

せしこと（禽獣を以て縛るを見たる時
り犬中と同視せしなり放飲の場
合西洋人も人の足るを許さゞるより
此の誤解を抱きしなる

一 合中交接の婦人も邦人と異なる
ことある故の思惟しすること甚しくは
書きあらされど此の誤解ありしを
おもはるゝ特に日本人と同一なることを
弁し置あり

一 西洋人をすべて長幹の人の如く雖
躯のこの絶大なりと思惟せり
通常の丈ある人の抵抗長幹なるもの

ありて診く思惟し[illegible]

一 西洋人も[illegible]我等の[illegible]清くして
居るところ[illegible]（これは和して敷布の
説明を触れて従ふべし居るもの
つけるなりとあり

一 西洋のは医術直せしありしが
日本は未だしの外科医の如く
[illegible]（元は[illegible]のすゝめられ
診る洲の他も絶えず[illegible]

○東山の春色も駿遠の境につゞく山々の[illegible]
あれども[illegible]
[illegible]の色までもすへきも[illegible]白色に節

を盛く筆も把らず閑居閑寂を独ちたる余
うゐ今の状態なる縁なく轉地したりし田
後を祈りける處此湯島沢寓用充態
ならしかすは露闘河の際なりける轉地の
放一寸の足くす庸處に去りし慢進し家
人と合上めの安否をきく団しむと云ふ余の
先生を庵膝に拠なく去逢ず終る折柄
一枝のことおこ頭る七年来余の蘆墻
を想ひける一言を云ふこの宮て大おく
ころこん云ても黄白の應酬意義の他
其をえんとおもしき事は保ち得ざるも
余が今まで来の手を離るるのにしむるとき

予到りて庵根前に備し意備し待禁
する能はず嗚呼しく此の南船の煩悩を
明すも清すべきし、　三月廿一日記
○名家の書畫を張り文を書る一横幅を
高くしおることのあり其中より獨めあるを
解をえるにあらさんももうぶるる所蔵す
（一）傳も不庵をえあるあらさんべし嫌ひ入
る、其中因むしきるの如し
山陽 蘐 詩　因是 詩 菊面　亀井道載 詩　玉堂
山水 竹洞 竹　椿亭 書　春樵 拔进 詩　梓園
中略 詩　武清 画　聯斎 詩　登々庵 詩 武元 洗紀
芸閣 書　紅屁 詩　愚山 詩 松本 月亭 詩 世

◎一政変ありし時局を経る山本内閣の命を臨機
に際する唯れ後継内閣未だ立案を得ず山
本内閣の総辞職を為さしめる所以と而も後
継内閣を組織すべき實に容易にあらず衆議
に多数を占むる政友会を基として内閣を組織
せしめ順序の於てなれも西園寺を紀せる
べく後に起りとするも貴族院の廃除の決
議を目指さらん内閣組織案と称しての後
あれとも訴へ任せむところなる大隈伯を紀せる
衆をも實際勢力ありて非政友会三派を仰の援け
て起ち議会を解散して輸贏を争ふあるを
待ちて扶を一策あり此点に於て山縣も流石に

困る所ありて大隈案を一概に排斥せずして政
友会と協力して寺内も貴族院の首相たる
貴も了大将使者を寄せしこととなる然しも益
中の意識を置くところ又山本伯を先帝の信任
を擁して人物として全然て兼務
を致さんとすべく上に於て井上侯伊東伯先帝に徳信
ありしもの今や中なる諸ひて内
大臣伏見宮を組し實際を与へつつもんとん
語る記者を見せて以て又恐らく由て了臣も見
候せしものとしての而も又之れを尤も好く在る
後に去るること勿論也後更に一つの言
ありし山本の動し様のくりを折りなるも更

さて政府今年の事務に就て世中の悪感を買ふ
る一事あり桂公は故ありて同家の金を松田
男に与へたるの奏請をなしたりしことあり日露
ときに三万円也然るに移しあると見えしく未だ公
然に散見せず　まさしく松田と桂と同事に
もあらずなし　時に今年の事務と見られたる公に
なきん因に記す此比支那公使と共に大隈邸
に加藤男爵も招待す余も亦招かれたるか藤原真
西男に◎貴族院の村田へ山本を罵倒しける
ことを英国流に気まづくつけあるを山本への戯し
て居たるを解しうるし　勝算ありとあれ
あの村田の仕打と山本の談話とは余大なること

加藤男もまた式の事を為すとして然うする
重派の接触完来ありし又記す時局に處し
大隈伯時々自ら起つの意あり（三月廿一日記）
◎世有横井翁の書跡未だ架中にありしが之
れを獲んと欲する年あり偶ま一詩を録して
示さる古今の書あります折り開いて見るに
韻もよくするとして然るとの文は酒を添へたる
一幅を贈らる真に其の真なる
ひめる世上の諸者世の多く顧せざる千載一遇
政とすべし　詩に曰く
仙客偶過新雨須　更将葉気散
翔気玄談揮塵振意為雄賦

随意鷗鳥出群意径露多前秋
雨過雲涼動遠山雲消看懶麓
門深鉄笑指無羅称此尺
花影鏡　謝柏秀才来訪
　　蘿隠無明子

北梅ニ深く小泉檀山ニ宛て送る三通の書
簡あり　一大概云々　一安積艮斎　一詩蕎
琴甚　玄々の書簡あり　跡をまくし
○前掲えりまか詩花家携告る中不明の
人を見渡くなる乞ぬ左
○拙斎　大窪性京都の儒　天保頃
　こふ詩あり

○幻庵
宗暉　臨済宗の僧　豊前
崇福寺八十七代　墨宗と云
号猿月　別号幻華　姓箕
井氏　箕井南渓　冥の弟
詩書画を能くし　詩名高し
文化十三年寂　壽六十七
猿月集一巻を著す
三兆斎と号す　濱世傳の
花手也

○月亭

○三月廿三日　秋　高田茶古山にて　淀行の旅
明印ニ送るの言葉をつまつの人今も机くの本
王子の別

今日では早大同人八四五の外菊池男あるのみ長こそ
大隈前首相成瀬仁蔵も来たる、鳩山博士
会頭と早大の重なることを混しても次第
男の世婿阪谷芳郎男も来る、此の儀を識
会停会の状勢等議して見ゐつ政治問題
ならぬ如きも菊池や阪谷男は英吉利ある人の
小数党との勢力に於ては後藤の様を助くることも今
日なきは拘らず其の主張を貫き気を戴行し
言ふも（己むを）自暴自棄の態におちいるを称するや滋深
男は商人的純なるで日本では商人の掛をす
る場合とちがる細く具悪しくまり投げ出
すの風あるも日本の政治上の十数年を見るに

十二

うしと笑ふることなく妙に論じ男爵は酒を傾
耳熱するまま忽ち勝を追ひて男は奥のこときさ
最近政治家大隈のごとき文相どうなくては
人を得んと思はんず自分から経歴なし是非
するや今の時局は幕末のそれとよく
似ることを覚え政治以後大正元年の遺命
政治上意志満足せしことあらしも時に政
ありて党も同じく相互の体面を維持しある
を覚ゆ然るに此の政党内閣の如きと見
れば理想家も出し幕末に於ては実に人物を
排斥せし旗幟なれどここに至りて又見来
人をコンナ人にゐるとおもふれどもの見ゐし

自分ともに陸軍省をもやめさし 軍務の係
務の職りしることあり、其の係命を受けとる
折節初るこのは不逞の蛟龍あり、之れを諭し
見咬しれども見に座せさしは任り詫ん
うるの人を論つて見咬に座せさる時と建描
すりも書きすることも済し とることさらに皆々聴
しを詫ん一人行くこのなくしてなくの
自分共の職事あるとあらさんと貧之闘を引
き壮士(此時勇の配分)四五輩に敵と給役
させと過つてみんなあんびしもなく恐ん入りまし
此ところ事もすかさひちもせさりし コレ式の事
ひすら恐ん致きこそおかをえて自分と

十三

小節にて勤めし コンナものも一期の初めて
八幕府と 一トタマリもあいと思つたの者の
政権遠衛 政府も大分幕末の有様に
似寄りなりなりと嗟歎ちよる 諸さい
ろく教育(可験)さうつるも試験制度のまく
海り乗池男の識海流しま 自分とは随分苦
醜まえをつけしもあひあつに その罪に私し
て試験度止を主結するのひあると一笑す往
くの絶無なとあり 三艱を受けても十分通ら
く難所をつけたる、まことよ無一味ある 是
此の売るなりし 此の男方今に抱一葉風
根蓋亦の二枚 打扇風せてる奴を示さる、之

ハ前年美術倶楽部の展覧会に宗達光琳の風雷神の屏風を出品したる比較極完に興味を覚えたる記憶中より出外にか様清正朝鮮征伐より先ち征服の準備を細かなる書四枚つゞきの下絵を示さるこれを表装とするべき屏風の文書と覚えたり

○近時書簡の中より諸葛次郎吉夫人と署したる書簡あるも足利の小泉檀山氏より出海の豪家亀川三郎立斎四男を養子として今はなることを載す識者人名辞書に就て其人の来歴を知らずと云ふ　以上

諸葛琴臺（モロクズ）　儒者ナリ

名ハ蠡、字ハ君測、鬚黄髪山人ト號シ次郎太夫ト稱ス、下野ノ人上野輪王寺宮ノ侍讀タリ又姫路侯ニ仕フ立原翠軒留テ水戸藩ニ薦ム其ノ姓氏ノ華人ニ似ルヲ以テ怪マル翠軒書ヲ與ヘテ本邦稱號ノ舊姓ニ從フニ如カザルヲ云フ琴臺答ヘテ曰ク卑族ノ稱スル所ハ祖宗ノ所系ニ出ヅ意ヲ以テ華ニ擬スルニ非ズ今之ヲ更ムルハ其祖先ヲ辱蔑スルナリト之ヲ辭セリ以テ其人ト爲リヲ知ルベシ寛政九年琴臺年甫メテ五十誕日口號ノ詩ニ云ク

久向糟丘推麵車、青錢買醉弄物華、爾來忘却知天命、四十九年眠酒家、

最モ度量ノ學ニ精シク律量全編ノ著アリ文化七年十一月十七日歿ス享年六十三下谷養玉院ニ葬ル墓面ヲバ髭真髮先生ノ墓ト題スルノミ

著書　髭真髮山人集初篇、焚書收燼竝附錄、讀論語、大學考、唐詩格、鄉葬略言、經學或問、印則、易筮探頤、平氏春秋、孝經考、墨子箋、古碑考、諸葛詩傳内外編、李王文解、遜月樓雜記、政語等

（出所　髭真髮山人集初編、江戸名家墓所一覧）

○平山堂に於て岩倉右府前原一誠の書簡二葉を見る岩倉公の其は四通の書簡を收め黒田清隆宛前原の其は四通を收め中村恭洋宛也恭洋とは中村子精の事歟此の二葉の内容は諸國事上の機密を叙す右府の書簡は諸西南戰爭の事に関し維新軍略の得失に渉り前原のは維新の戰爭に関し共に得易からさるの文書也此種の書簡は好事家の外に史料としても相當の價値あるを以つても随つて價高く不廉也唯此双通中此種の書簡遺しうるに足るを以つて價に拘ら

すれはことさら左様ニ害中一通ニてを抑
し其の一斑を示すと云ふ
素読一見
一 河路ゝ継本御含富之電報并
一 旧知全く宜之江電報粗田預り
別紙之能々御一読と存候至急回達
書記宛之会しとう
一 継本御含分の電信甚タ不審之候
ハ貴公会之軽はかる通すや北能中
の愚意の得しの
一 右御請申の候 柳継本江相互ニシ繰之
メランサンめすハ御朝業ニやえす

軍略之儀可然抜是し戸兵ニ今の
事ハ所謂水沓を隔テ、カユキヲカクニ
テめすれ共致し難し然しれ共継本のつき
危殆極りて換する如論決極御
必勝ハ素り御免勝と待得共先ン
ズルト後ルルト五土人民上死生得失
いう計之差の有し継ト熟念
此事之先自大段を以て根軸ト
し関以西之ノ論ハ是らの私ハ不
私ト是ヨリ謀リハ生し可申
引と存し早く一業めぐる莫貴
心得論決ナキを要ス四十し以上

二十七　　見紀

里多殿

此条ハ里見よりも先と存也

此稿の様書文書此ハ里甲家より出るも未
亡人高家の出ると軒て売ルか故也

並すら我清忠勤奉献藤原僕覧
頗多佗粗ニ而明ハ明ハ遂之一字も
成らし御冷笑下さん候 上呂の道
洗たことそ

一 三日之戦ハ淀城迄乗取て
後藤保戦迄之由也

一 賊軍徳川公桑名松山高松紀州大
垣其外ニ而も数萬之由 三日賊軍
八千式ハ一萬許と云死人千人許傷
者不知数
一 賊軍退而今ハ橋山崎
一 藤堂怯惰遂帰本営
一 七日攻備後福山城并城下焼云
両備後者亀我兵也
一 我兵ち備前合出播摂之軍也 未得
報
一 姫路降ルトモ云未乃其実報
一 今日以鞠生船五万人之兵ヲ備後ニ

送ル藩兵萼華浦
一世子君從山陰道御上京先鋒十七日
其外世子君廿二日御出馬大分雲州
ト可交干戈 三件
一御直書作ニハ雲州因州ハ大義次ニ誘導
ニ不聞即討ト為
一因城ニ趣トモ有之
一因賊第一追撃ト候時ハ必逃三
冊送江御遷座也下ノ事ニモ可然ル時
ハ直ニ闕下江御通メ御旨拝御請
ト為おてしるの
一軍艦二隻ヲ遣ス雲州海江逃メん也

米ハ残ん軍艦を率ニ一先馬関ニ下り
候且又ゴンボードゴンボード長崎迄候付ゴン
ボード馬関着上弟義直ニ乗組上京
ニ趣リ也
支配中大略如斯御推察奉希候也
ハ前て御あ願候也
正月十二日
野村和作中田先生
前原様
佐藤
余ハ委細前原より青雨君干御承知
とも存申候ニ付閣筆此段の次第早々如斯

其中一通は後に紀伊の事に関するものあり
又一通 収斂の術を鳴らし 財政整理
北条の賊臣を誅戮し、或はもつて國家を
定むる意氣あり 慷慨たる一篇あり 一箇
の此の書簡は後の此れ後に於て纏まりし機
を発し 中央政府より深く嫌の厄に遇はるゝ
し 不幸にも早く此の書簡と見る 他の一通
今は明かに関係なり 遠因に與つて麻
痺の薬剤をもとめたる書を交たる證也
余前原とは縁あり 此人の書簡余に於て
特殊の趣味あり

（三月廿六日 雨中誌）

○高木方にて古銅佛具を獲たり 其の花瓶あり 古
るもの閼伽の如くし 形桶に似て手つきあるもの 径
四寸 高さ四寸許 塗金隠見す、ぬりも象
つきたるも、其銘に紀年「閼伽」とあり 其
し 梵語閼伽は梵語の香水、底に刻
まれたる 弘長三年 十月 大安寺と二行に
刻す、大安寺は奈良七大寺の一、聖武天皇の
代に出來たる、此器弘長の刻字あるを以て
察すれば 鎌倉の時代亀山帝の時世大安寺
の物なること明かなり。然れども大安寺或
他にもあらん 斷未遽に奈良の大安寺と
斷ずるの早きに似たり、弘長三年は是

き文永とあり弘長の前の文応にて日蓮立正
安国論を著はしたる年也
○高橋理吉も追刻の印文数字を寄
せたる、印文皆時代事を概するの様、篆
しなる山重く微なる作る者、篆体なるの山重
く似たるものなし　此等の時を言ふ又
思ひさる者あるも　墳根を写し年印に据
する故ありきなるあらず、古を取めし時代
局を叙するを然ふと言ふ、山本内閣倒れた
数々後継内閣未成らず元老数々会合すれ
ども妥案を得ず時局紛々の大正三年三
月三十日記す

土山雨瓦解

○梵語ト關係あるものアイヌ語ニ於て
ワッカと云ふ音稍近し而もアイヌ語の
梵語と佛ニ似たる偶然のものに近く
文法あるまあします我邦舟師ありてア
カと云ふことを遍く通語なり、これ梵語
にて來るうアイヌにも來るもの、舟師
の用ゆるを經て之を公アイヌ語と文法
あるまま似たり
○か賀への歌代(未詳)夜歌)の代句
細らの豐作 金産後藤口藥 流石
こうぶの味あるも 未だ何も知らぬより直
ちに難し

三つまではしるしを あそこし師

□杉孝作の七律一幅をおくられしも其
欲に杏蒔とあるも蒔は白の意なれば言
ハ名のひと従々批字を書すやう杏更へ
と書すべき数と思へり

□高田早苗の深(?)行を送る会に或人より
のうたを送らる人托称の状況也形式
を外れて幾分の興味をのこしけるは数(?)顧する
の団体にる漫交会と一ツ橋大学時代の同窓
会也 漫交会といへる豊川良平氏の重立ち

なれどさすがに多人も来り倫敦行の徒にも非
常に高田早苗なんどもありて何にも勤めて
そうめなき中のよしとて学長の光る演説
に続て鳩山和夫三宅や豊川なんどの先生
中講年(?)真面目なる演説をせす所謂
甲論乙駁となり議論ありて一種の討論
会を現出し互ひに皮肉を云ひ合へるも
何人の会ありとても興味を覚へざる
織りて二三百一ツ橋時代の同志会にて四五
の中田店三河屋に於て倶楽部なりと
十九ひろきもの其会員二四の会員を抛て
酒肉を思ひ存分喰ひてある荒平の館

りと剃すまむゆの[illegible]らむとふひに錦を国
ちも氣燄を吐くみ掃へて充ちゝ三十年
ちゆると異なるなく[illegible]ぬ白の未遂中も
路るく花くうくりて一夕の興を添へし
事の[illegible]なる

田中銕三郎 田中正平 渋[illegible]
大原利義[illegible]出方寧 [illegible]四郎
錦[illegible]直 田原榮 山縣[illegible]次 高田
早苗 不[illegible]一 青[illegible]
[illegible]古 平田鉄次 堀一 根岸錬次
郎 外一人 三宅雄次郎

[illegible]上 田中銕三郎 [illegible]ろに記[illegible]行識

其の同窓生某の名簿に居所の記し難く
[illegible]始来以左[illegible]の脱漏あらん

大正三年四月

イロハ順

京橋越前堀町二ノ二	石渡敏一君
牛込水道町三八	市島鎌吉君
四谷大番町一九	石川千代松君
麻布北日ケ窪町四一	原田鎮治君
四谷坂町八	長谷川方文君
芝下高輪町五六	堀達君
牛込白銀町二九	渡部朔君
芝白金三光町四五二	與倉東隆君
牛込東五軒町一二	横山又次郎君
本郷彌生町二	田中舘愛橘君
京橋月島東仲通十一ノ八	田中正平君
小石川關口町二〇〇	高田早苗君
牛込仲町九	田原榮君
牛込余丁町一ノ二	坪内雄藏君
赤坂台町五一	根岸錬次郎君
牛込土佐原町二ノ一	鍋倉直君
牛込南山伏町一六	中原貞三郎君
青山南町六ノ一四七	隈本有尚君
小石川林町一八	熊倉恭三君
横濱市西戸部二	山縣量次君
荏原郡大井町鹿島谷三〇三四	山口俊太郎君
小石川諏訪町三六	藤澤利喜太郎君
芝三田小山町五	藤田四郎君
府下巣鴨町一〇八五	香坂駒太郎君
下谷中根岸一〇	荒川義太郎君
麴町飯田町三ノ二八	天野爲之君
小石川茗荷谷町五六	有賀長雄君
本所千歳町一八	坂内冬藏君
小石川大門町三〇	澤邊春水君
赤坂新坂町八二	三宅雄二郎君
京橋區南金六町一〇	關直彦君
麴町壹番町四七	土方寧君

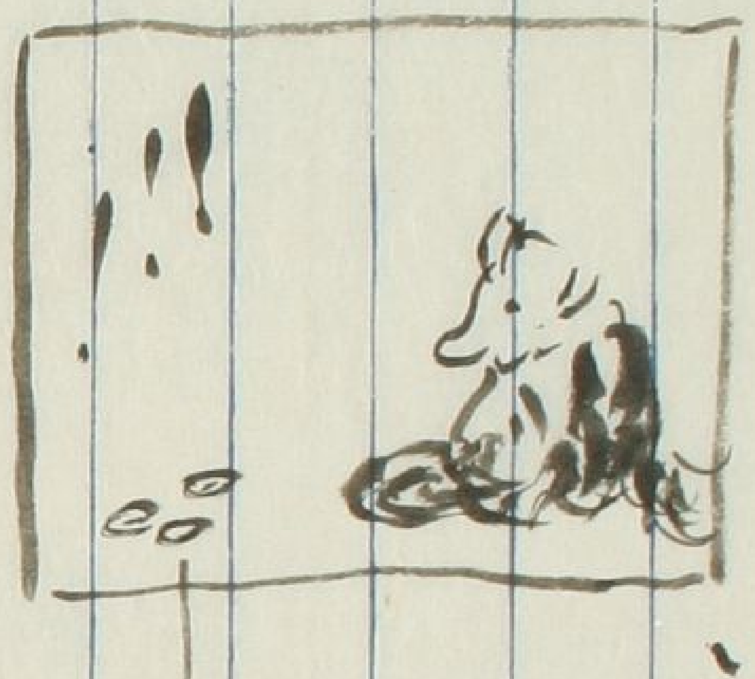
ゝ蛍し有るおの句二ツ三句を示し余の答
正をもとむ

立比叡山　夜宇治伏見　醍醐鞍馬
祇園四条鴨川起知恩銀閣天龍
嵯峨清滝桂川　かつら桟渡里飛江

○望月八の狐の気を首ふるを書のさ
狂歌を詠しなる楠を書て来るその
あり旅ひのる俺の宗京都の三浦先生の
こゝ萩にりきを要めんことを請すと云
狂歌を云て　花ハを此先生のの也

大方の世また人ること

こころせよゑひ生薬をも
狐なりけるし
道八 花押



銭数くしあり

○信夫恕軒の蔵書三万拾十部一千餘冊
子濱まうしえ氏早稲田の図書館に寄
贈し来る濱まうし早稲田の校友にて恕軒
とるん書その帝大教師の代数を受
けるる人此者の是に図書館に何やら縁固

ゆきまりつん図書と文章ものまく附り立
てらふろとの跡本なし昨の初めて絵堂
り点検を試むるに流石に恕軒か徒ら
書を挿するの人なりしを笑ふ大抵
の図書毎冊縦頭縦尾に読過の形跡
ありて朱筆に句読切りあるのみならず皆
此誤を加ふるところの多し中にも文章の批
するる所雌黄を加へたる個所十切り錦織
文録の序録のぬき縦横に書きてコンナ
愚文で作るその寫手出かとらに書き文
ことにと校ゑ批評加へりあり先生自
態が一生心血の注ぐ所此の一千冊の

資金の等級あること長く加護を
要す　（四月廿六日）
○十五日議長の送別会に大隈卿と相
さ、いつもと政府をうけて辨理して伯と同
の旅行に家を開ける、例のごとく伯快活
縦横傍らの世ける夫人と時々伯の話を遮
きりあるその煩さノベツお流しするそれを
皆検氏し上るにますまいりませんと江表
する抗せ伯同く おんの云くいろくの人まする
負販の連れ生業とし来するに困る差
支の所を始めて断れば莫大なる出費御
金を見合せる、それと云ふの困つてヤツ

ト断わる方法を案出しれ、なおもノッピキなら
ぬ筆集りの為の依頼を受けしのび早速出
来の断り口上を陳べてヤット撃退しれぞ
れハ外でもない、おんを闘将びない、うち矢鱈
な陣頭に立ため、おんそ謀略を帷幄の間
にめぐらす謀将びある、謀ならいつびも
奉公うもせる陣頭のまつことを帰
去を忽びるといふのびしづくるる清
水君に引きれつれと覚ゆる、伯父近く
東宮輔導の職の定まるたるの時分
陸海軍よも出び僕まて大分従たうか
いつれも――を晩歎かされ陸海の軍縮ハ

王者の教育に必要なるもの切論ひあるべからず
うしゑんと必要の一部なる)きぬ不可太切
なるべき(全)憲教育ひあらす其主の源動に
依つては偏頗なる事ひあるのみならず
立憲教育の補輔(せざるを得ず)を為すべき
ものなりて居らぬのみならず寧ろ奇怪と云
ふべき事を得ぬと評する青四月六日野々宮
す(七日新記)
○昨日大隈内閣の総辞職に付き内務省と内
務大臣は元老会議に於て山縣井上大隈
説を聴きて其協議を経し松方大山とこれに又話を
ましてなるも昨日も松方大山なりしこん(い)と云ふ人

を以て井上伯に向かひし時は大隈伯を一蹴するから
お聞きに形勢と云ふ井上よりも伯に向つて内務省
をぬきんでてするに違ひ井上は穏かに帰宅後
自由主義的伯らし井上を訪ひて来れる事あるも
我が来りて此等の理由に憲政会の御意(?)新
迄の列の為になりしのみならず今回の事を見るに全く
(異なるきまる)きさうし井上と大隈両公の様に
称めて法例すれば何明前に云ひに開積おもしろ
うらさんども国家の手を集まる為と云ふ
云ふ程なることも両方共解け何とか自宅の
体ならんか為す事を拝察しれんども
よろしくぬ首相の内心自ら起りの決意を

あしらひを写したるの形勢也然る大隈卿より
りたるに浴客雲集せし折ふし幸方なく伯
に会する由もなく気を出させば猶更
明か中々伯と談話するによれば伯も自重
の態度をとりえざりしを寡言の勢気を
あしらひ伯をしてこの事を論じし初めに記つの
こころよさを説え南氏も出させしとて語し
ありさまを高田も捨てる南氏と伯と俱
又して種々の事を尋ねる話も尽きし伯の
りやう出せず評判の通に合するもとに然ば
しかるにぞ元老官の事もて薩派の大山
松方伯の記つを読むさまらうつき言ひしが

の面持ちなくしたるを得て話ありと伯記し
そしての有さまなるべし後迄伊藤に気にてき
一寸見え其人流することとなるを知るうち
○此十二日大隈侯高田早苗の諸氏を見送りて
後井上侯邸に赴きたる山縣松方大山諸元老を
見て直ちに其中に一席の後る長坂派に移りなれ共
内密の評を述べて勝つまでも概して好待遇え
果てを得て多くの役所の傍合を押しもちて薩
派の松方大山に会し是非あるなるままうちに
とにかくも言ひ出しけることを語りの回りをもつの女
しこの秘密に当たる所の一事たる松方の手も
氣を忍びてもしも大隈内閣を組織せんは出来

海軍部内に手をのべて種々なる隠微を摘出
させしと思はるることなる 話は如何なる会心
伯は然る考へなく深く心組み分けずと
係絶し海の元老も係絶の位地にありたる
彼方も初めて尽きんとして 伯の意見に同ずること
となりたるところ 彼方の為にある所は言を
も其く川崎造船所の秘密を暴露させんこ
とにあるや論なし 既に對契約上海軍
七北あるに當惑して清浦に訴ふるごとき
態度に出でざるべく彼方も亦鎮撫の衝に
あたることなるらん 大隈内閣の一大暗礁となる
ずこれまた之を推すして恵依しゐるなり

相示十二日勅命によりて大隈内閣は内閣改
造の大命を拝し されど首相たるよ
うしと覚しく伯は又人の意こそを得まて
所に於ては陛下に伯の意見を聞こしめさ
んとおぼしめされて大隈なるもあらんとの御
諚を賜りたるなり也 十二日に大隈内閣の改
造の議を論ずる事御餞 尾崎大隈 三浦
枢密を召して書議を謝しよさりて
其内に又来れる一つさまも大隈を説く
ための会見なることを云ふ又尾崎も
三浦も大隈を説くためにまれるやこえ又
其他に政府諸大臣三人とせる事も大隈

一人にて翻訳の功力なきに由て内密に之れんことを勧
めんとせしに初めて大黒の呼く読して之なり
を以て見れば謹んで御納めありしことを又未だ
に難かりず（四月十三日午後録）
○四月十四日 伯内家の後割 大黒屋尾崎の蘭学者
く国語を話して 訳す し を兼ねて
本日午後より伯爵に謁見す 玄関より西洋
室の入口まで多く紅氈を敷つて之を見 十ツト
通行する 西洋らんとする ここの庄
之に深く錦しあるに庄を暗く明けて当つて西
洋玄関にて見れば之に之て新しき伯の親族と
内室しきりに信夫氏永井源太郎家従らが

卑を用ひて其後を待ちつゝありし余ら之につ
信夫氏に挨拶して此所に於て余らを紹介し
て伯に西洋を見ひなることなりき つきて
あらんには其事ありて犬黒の四郎 ありしこと
あらずして今朝ありて候し伯に謁見して印
つて勧めまゐらせしを信夫氏云ふ 伯に謁見
節なの其事を寄りし挨して本日の人々
先生に到りて此所に来りて其を守り難関を
犬黒尾崎の前に至り犬黒は別席入園
せしに湯ずすとすれば臣下を待ちたる士
尾崎は西洋とらんにコヤウをうつし西洋
初めて伯に向つて幹部の知識に入れよと請

来し難く多く来たる様子もなかりしかば其故
越前派は一変し或は斎藤をも主とせん八文
路に立つる者なき様子に見えけれバ
なかなかも昨将は永井田中とゝも加藤高明
を総領とし尾崎を倶らんとを組織し乍ら
而して其る許りんとする中す永井尾崎を伴
多く派く尾崎の真意を探るを始とす
尾崎を伸介し大臣の様子を黄すなる
大隈伯は大浦を退任とすし同志会の大浦
を擁し居るもそ伯は尾崎と共に
を止めんとす見るに至るは伯は総理として
尚方内閣を維持せんと塩沢思ひ伯は尾崎

[illegible]其を指さる様可みける群羅心地の上
[illegible]其の生じて不の世大
浦を擁護しても尾崎を[illegible]
犬養尾崎尚右を見るこそも伯
内容を同志会の持ちて天下の
[illegible]所とすべき事全く会て同
議する事其説を聴し 犬養の相談に
別りえを[illegible]ここに於て仁方蔵相
総理[illegible]所内閣総理
も追ふて之等の総裁に就き伯は此方図陸
田中仙の訪ひを受け一致し安保中
派くのし犬養其の其に同の立つると共に

伺と会話す、漏れ多けれバ、く所は擱きれハ岡氏
寺ならしと一人もへ入間せす伺ひ話しを好ミ云ハ
中立の渕頭を為し、となる、これ大森ハ分
裂びを恐れを一時を糊塗する筆なると
如くなる伺ひ大森ハ離し條悠高麗ます更
其話術を弄きハ餘地を以て罵する
為りと云ふ大森ハ之に就て馬紙華手島重
を呼りて入りする大森ハ西もん為なる
大森ハ両氏を止見んとす馬紙セしく物
〇蓋し同氏の関係なし、大森ハ入間を
勤なる為なることを云ふ迄もなし岡氏
壹の体なき如なる以上を残る所ハ云

尾崎の沙汰の如き稍や外務と尾崎
を擁き過ぎ話するに足らずと云ふ三日平次
伯郎を訪し大久保に後内を訪ねて
[illegible]
〇尾崎尾崎の退の決する大隈なる大隈に申し
氣らしくも前後なく其家なりて晩餐に招
大隈伯に於ても尾崎と伯が陳述中
可なり後ち島君も親しく会見し会議に同所
大隈伯及方々二三の有識の同人等
来り議し同目次頭を任じ江木翠英公
ども尚同井上侯の使として九々の
結果を如何なるべきやを決する、江木翠英公

今度の内閣は元老を排して出来し、初より内閣の
組閣や尾崎氏は中正会に相談する方針やに
つき秘密に附する所なれは大浦を内務に据
へることゝし若月各方面に於て議論ありて其
事に尾崎を総裁とも御免ありしと云ふ事
漸く纏り得しか、夫れとも菅のとさとくて
内閣は大浦を異党も恐れ居りしを以て廻してさて党派
既にも一木喜徳郎を挙くる事にて内務
擬することゝなりて内閣ありて之を観るも危
而も又若槻内閣も一層内定しある事
実に如何し海相も事上就ては矢代の
と定まりつゝ然るを内閣の閣僚ある

すとてこれを動くにあたりまてあしろ、何れにして
尾崎を捨て得くも夫れや其の一大問題
ならんも田の法を顧れは中正会にたて
かん、内務の閣を選へても差支なきは
と党派を総めて伯と尾崎と伯等や
とすと云ふ組し内務の件を尾崎の返
伯等と共に愚問をなし云ふ者のよし、次
上に云ふ二ヶ条は内務の件を示すと云ふ
またかなし。伯と尾崎との会談を三回
あり。漸く随意にある事を取りて、
物議の調子を偵察するも伯の親しく低
くし陰気を纏めたれは近く会議の

長きに亘る不満の兆のあらはれやうなり両三日来
二方ならず十四日の如きは既に紛擾継続
し結局は外務を尾崎に引受けしむる事務
の真意は寧ろ尾崎に言はしめんとするに在
ることは不満なりしも遂にはかやうと殺気
をさへ帯びたる様なりしが紛擾の結果は左
まで大ならずして尾崎は絶対に絶縁を
要求せられしことは其の公司法の精神なる
べからずと議し外に突出せる一派の反省
中にあらず。花井を説伏せる経過の
活動自由とする事に伴ひ得るものと
少なきことに初めしあるは審議に渡る事なり

を余儀なく辞し、結局を事実上にせり、尾崎を
説き殊更の困難ありしに拘らずその事由は
却って尾崎の含意の余地を残しなりき
其の翌朝尾崎派の新聞紙は実に中には言ふ大臣と
尾崎に入閣を勧誘せる新聞社其際の言
論の行掛り上大臣入（入閣せずんば以上尾崎
ひたり入閣出来ずとも差支へなし）、右
紛擾は所謂甚だ愚かしく新聞を振
き廻し行掛りを解き尾崎の退
を求むるに足るのみ此状の余論を要する
に力ありとは論なし　十四日の紛を辞し
たるなり（四月十五日報知新聞）

○四月十五日午後より非役之残らず候て拙者
其外を召出して大組頭に而申伯父之内
聞役職を蒙上ニ而御内之事守るし旅籠
宿方へ参り御内或拙者申大家来
とて其余へ御書殿により風を究ニ
前出来候て政堂出身の同志之二人も入
し得ものを宣因り手世出も而皆言
可傍也新くありもろもろ言而向ニ
すし其れこれ御に故我等ニ同志に
御気あり恙し一人も御堂也を入れ我を知
り者らんくも加藤従兄の不信依旧識
を其のお為と余も聴へて其日にて

候てまること当り尾崎ちに別れ奥まで参り
其人に敵し祝詞を読みまいらせ又来郎武芸
旅宿の談まで又人の従に従え公武分へ入
関と浮し通信の様子を見出との事、これハ
まことに外部と知れたる事也余もこれを聴
へて先に新くてこそ同志合の内郎も治
まるしとて精甚能く従へる合会の事
其を論る泊々来郎輪を極す乱
き其人の従ろしをやめければ本山藩士の
注意ありて私郎よりも浮し申すと
論る其の御様を知りければ翔に庵室に散歩
さろしが健康を損する事何事かあらん

ならずは又人思ふ大隈はおきやんでなしこまる忙
うらしいことが劉(?)会に健康に障りはせん
と評さる、無骨の撰るも指南の倭猪(?)に乳て
いか又人待(?)是の時を喰ひあり渋ゝとなる
ずる又人思ふなるが井上但し力瘤を入れて
それさし此の語非 前記あるも無さりしならず
自身も死約の道ゆきを取りて国家を
大隈に托して多けれど我心なきと人又も評する
る立て一生仰ぎ物のようにならる伯に政府を
引渡さるとも此る人為するも本心に立
かへるの影なるべき歟、岬(?)内ちの人
関せざるを余しなくしたるは多く紛し岬内さ

余程無の毒也あの人ならまゝ内閣を受
ようなる事なし尚印藤(?)をを任せさするの為
めならんと評さる
大隈内閣を謝し奏上現任より退之に
まも非改革派二派余内に於て義人と気取し
等記あり先づ之迄にしては四民党ても
四年ともに一人も入閣せず中西人ら有志派
く尾崎を罷めは満て同派中も
尾崎の持子(?)を擁ひつゝ首領へ引なるを
飛さん不平満々利己を極まるべき所
歎ずるものか同志者を其推としても内閣
未だならも今の世にする内部不平多く

其銘悦ゟも一木を入れなるハ其晩年位
を定め得ることか蔡の楷書らしき
をいふなり 然るに蕭子の論ずる所
くして本帖内容を蘇東坡き 跋後云
かあることを得べきや 云々 尤来を
き所論なり也

○唐国流人大江三千風の墨跡を蔵し
来る 其書ゟも竪二寸程なる所の書
●出山行の賦文有り後に句一首を題す
定家の小倉山荘に擬ひたる[illegible]の句等三氏
の古稀歓ひ寿賀ひのべて[illegible]
名やよく濡れひや嵯峨の夕しぐれ

○吉田氏過 模印二顆を蔵らし来りて見す
敦煌太守に贈れる劉聡官封泥を拓し
贈りたる味あり 徐氏印と三字自ら
の印を模す 原印と及び小字を[illegible] 拓し徐

氏の刀意をのせり

肅啓愈々御清光之條奉賀候陳者帝國議會開設以來二十五年に相成候が此間初期以來衆議院議員として勤續せる者曉天の星も啻ならず候次第にて指を屈すれば僅かに左記の七氏に過ぎず候就ては是等諸氏の功勞を國民的に表彰し其の事蹟を顯頌記念致度來る二十六日午後三時築地精養軒に於て七氏を招待し表彰式擧行記念品贈呈致度候に付以上の趣意御贊同の上萬障御繰合せ御賁臨を得度此段御案內旁々得貴意度候

追て準備の都合も有之候に付別紙封入葉書に御出席の有無廿四日迄に御返事願度候

＝注意＝

一會費　三圓當日御持參被下度候
一服裝　フロックコート又は羽織袴を御着用願度候
一記念　繪葉書二葉當日會員に差上可申候

表彰すべき人名

犬養毅君(國民)　尾崎行雄君(中正)　河野廣中君(同志)
島田三郎君(同志)　箕浦勝人君(同志)　元田肇君(政友)
井上角五郎君(政友)

以上

大正三年三月廿二日

勤續議員表彰會
發起人
伯爵　大隈重信　伯爵　板垣退助
男爵　澁澤榮一　男爵　阪谷芳郎
奧繁三郎　關直彥
中野武營　黑岩周六
德富猪一郎　石河幹明

○スコト也余の東京英語學校の時代の教
師也當時あり[illegible]中學の教
師として[illegible]人[illegible]し英語學

機的代ニ多数の外国人来り[illegible]し此人ハ
も上級を教へてる者なり[illegible]づらの人[illegible]
[illegible]のめし[illegible]よこり[illegible]を紀[illegible]

今回布哇ヨリ來朝相成候エム、エム、スコット氏ハ明治四年ヨリ十四年ニ至ル間ニ於テ外國語學校、東京英語學校、大學豫備門、師範學校等ノ傭教師トシテ創業ノ際教則ノ範ヲ示シ教授ノ方法ヲ傳ヘ生徒ニ教授シ本邦教育上功績尠カラズ加之現ニ七十餘歳ノ高齢ヲ以テ布哇ニ於テ教育ニ從事シ本邦移民等ニ對シテ種々ノ便宜ヲ圖ル等本邦ヲ去ラレタル後モ本邦ニ對スル同情頗ル渥キコトニ有之候就イテハ此度ノ來朝ヲ機トシ、スコット氏會ヲ設ケ左記ノ事項實行致度候間何卒御賛成ヲ得度此段御依賴申上候也

大正三年四月十七日

スコット氏會發起人

伊澤修二	濱尾新	戸野周二郎
岡田良平	奥田義人	嘉納治五郎
田所美治	辻新次	坪井玄道
中川謙二郎	山川健次郎	野村龍太郎
松浦鎭次郎	藤澤利喜太郎	福原鐐二郎
木塲貞長	澤柳政太郎	阪谷芳郎
菊池大麓	三好學	土方寧

氏は親愛国者とも[illegible]とるを
〇三省布告[illegible]者續刊の[illegible]自分も教
[illegible]種々苦心して澁澤男ニ六萬五千円

の出資を求むることに力めたれど更に応ずる
ものなかりき　此の資金の借主はなるべくは
んば渋沢男出資を肯んぜずして躊躇
渋沢の三者共のなかなかに借主となることを肯ぜざりし故
任を負ふ覚悟のものにて得ることなく終に相
期の甚しく此に迫りて極めて切迫して催促しきりに
て迫るべきなれば若しさんばかりなれば渋沢は
ても規模の広大を主とし約五千部を蒐る
の計算にて先づ第二千円程の損失あるが
されば二萬円の資金なれば若し損失出
来上る考案を立てしが全くその甚だ困難
て作らしめこれを渋沢男に示し岩崎家

と男とに於て此二万円を寄附の積りなれば当
総さえもし尤も完成の暁には全部を刊
行すれば男に投資を償却すべき旨あ
ることを説きなるま男も賛成の意を表し
岩崎家の答を俟って決するもとなり
けり（四月廿日発表）

○主花北枝の書簡と帖を得たり断簡なれども
山叢也首部欄外に張込錯簡なるが如く
中芭蕉句を写しあり北枝の短冊と
思えるものゝなる雁あり也手紙もなり
く真の続きを探さなくし予の架中に未だ
無き断簡なれども断簡なるも傾ひ入ると云

よ北方仰之浦田和氏より新聞雑誌の書籍
一通を贈られ、該新聞を扨見るに
村々借りなき人なし余数年前より其の書
状を以んと欲し田舎新聞に依頼し望
けるに今まては其の村々之れを好む（四月廿
二日録）
○書籍類に於て六円を從し塩沢田中堀越
中島村々委員田原等と会議を為し致し
大沢内藤の文部省に於し私塾の條文を作
其の本を其の他要なるに大日本會
觀室のより寅和常識依り田舎の從年
經維持しり等教頭を請し何と謂ふ

暗誦し文部の書中の前内容目次の文部
より一と為筆算術々云ふことを望し
仰も其意を欲とせしと該文部を答
棧入迄き事ある其の掲要印の又紀要し
すも何の何意をとゆゑ
仰之語りて早く云ふ両側等三十日觖
行をつけも畫類にて接し教師の經綸
を者もて希んを覚えさる傑も此等にて
チト閉口しといふしけや云ふことを覚え
されるこう飽きても氣乗せで云ふ喉純
而追のみありし懶氣を信し來るとても
乃二十五才を元消されけんとするのや

と笑ひける
されくりおと告げ玉ひたまへる可し快なり
御らん起きしもあれくを引留めてまゝ
撥亂として轉する見く其の事のよき其人の
此の獅紀し於る所以を改治を全く群
小筆の才あり所も有る強識あることは
ひつこぬ人の才も華族官吏の家も皆
あひつことらで其の後の新年新しく立ち政治
を書かぬ新しき　天子を始めて輔翼
なんとする乎　其の後の兵を起すんとも余
ら起つ所以也　満天下の後の人も全を
撥けさるのより法るべき校正を指導

して全を撥けしめよと通じて行ふる
べき総選挙の準備の一端を論じさ

○大隈参議今般も推薦せんとする人物
は海援隊の其の唯一人、之れを行政裁判所
の評定となし坂本氏のみ、ことをつきる究
角の人物評もありては、唯一の推薦者
らとこそつよく詰れ、後に新政府
を輸ち得たり、其の内決日の新しく大隈郎よ
り電話して来たれり、余は坂本の
余も亦来て話語中にてありしが、坂本と

行政官の経験の無いことを言ふは余は地方
官となりての功をいはくに驚かされしは、余は後人
となりては経歴も無いが、素人として深大
また行政の方法を以て知れ、坂本を大いに得
る所があると云ふ事を謝して帰つたり
○尾崎那猪の話なりとて目論む事を語る
大隈伯の意を向え元老に反対し論る時元老らか稚
きの法文を弄さんと先つ井上らも合わせ
御苦労なる事の旨でを悩ハしたれど口を出
すや伯を元老を之に従ふも口を利かず
先づ政界の病状を論じて詐るの疑ある
を卸す帝を如何に補弼せんとする実あり也

ならずまでを慷慨し却て政党の話に入り
自分らは急に政党の必要を認めたるが
世俗に知らるゝ所の政党を自分も盛明
せずと云ふ紛糾の議論ありし事を論じ去
り一八の者らを大兵衆を押さへずんば元
老でひとく感触し満腔の憤慨を表し
うつを提起せんと欲し居る由にて法文を
生じてしまひ又政党の又井上侯を勝
を批するとも悲しく嘲ひに伏奏せんと思
ひしに個の入閣の物にも組織権を手中へ
了を許さん嘲ひに伏しも奏上を試みたるも
派党ではなく元分要録を得るまでの奏上

出来すらぬやうなるよし候し聖上を戴ひ
遊ハされんとすと云ふ
○當今朝も御内見の文部ニ涼文なとを已
日一説ハ御ひまなくの申出を成されしが兩氏学
校ノ搾も天叩ヲも切澱し、往々兩側ノ海
涼文を才も何れも出来すと云ひ不成もの
ならず、事ろ出来難き主要のもの一を追
文すのる者のすと切澱し更にまうを大
今今政宣公私共に機を同様の待遇をなさ
んとことを求むる一旦ハ假けんを云ふの
方法元論ぐや也
○三井物産が海軍高官收賄の紀綱波を受
け本役一同ハ罷と云ふ全体主ルハ三井
之人罷を業るべきなれば之れを甘庇護なん
とと皆ミ手段談調、文書偽等の欺名を
用くり、候し三井の金銭の出口と云ふ
切らノ伊那岩谷一ハの主ヘての方ヘを及ハ
さりし芝帳簿を三十萬円を拐帯へ
とおしあしと貸金を隠めたる等どの中
乃細工ぶり印で暴露の端緒をうるなる
あくせるの名義をすべし勝すあらば帳簿を
政府にもすれば罷を覚悟し絶せむ拐帯
歩うした押すを通すべうし北（四月廿九日銃）
○青木家の当主勝 松山と汽車中に会す

杉山氏近ごろ獨乙より新式の輪轉機を購ひ
入れたる話をきゝ而して其の機械据付は我等の
手にて獨乙よりエーバーと云ふ技師の派
遣を受けりとこれ日本人のこれに為し得ざる
しものゝ、我英人の此業に我意を存
そう、技師派遣の費数千円、而して此の技師
の振付けたる機械の運用頗く円滑
高低不一にして直ちにくるひなしとする迄、弐千
円の経費を消しても惜しまず遂げたる也 此技
師の派遣を先にし、今も此機械を要く
べき場合を含めて精密の測量を為遂げ
地盤を改めてまけて技師来りて更に測定

を為遂げ僅かに紙一枚程のくるひを生ぜしめざる
紙を枚のくる心精巧の機械なくてくるひを生
ずるや、これ千里也、是れ等を郡人らは此の
読むものは徐々に個様にしらずに金を増ま
さんとするを知るなり

○寫眞の道を悪弱に赴くのは、荒にあつて地
頭を何うも気に乗らぬ コンナ場へ来て
骨董ひねくるも真髄を撤する為めの方
便であるから併し過ぎて見えるあまりによいよ
が無いよいとあくのあるも真髄は少しく数
然も出来ぬる故が寫眞の寂寞の都合
で宜しかりし、ゆき則日前に訪れしに二階の

一二ぶの幅を揃ひたる前や容まもてび掛ける本
を見ずてここ々すると云ふことをなつて見ると今ま
で聞たる会つても置いたものが氣を哈がなうて
なつて来る、そこでどうも骨董を逸るとするな
さしなり此の宗もし用ゆる訳分を離れんと
可成部屋にあり合ふものをさくのしめたれ
此部屋を云ふかう生前なつた宗臣が集まる
まるて　ハイカラ西洋風の物好ものも宗も集合
て来たいとふのであるものが段々なんで仕く移し
て自分の流い趣味で行てのものを入れて居る例
ハ額も画の東洋其外の代のもとのものや四十
武枝の名の代の経切一行つを張つめとれ額

画や梵字の雲脚や　経切なうを張つてあれ
六枚折の小屏風や　古筆切れの二枚折屏風
なども示しも置いて居る所であるうしあれ
を集めるあらうものでる選擇の標準と大
しつである、々まひ得たものを机と硯と墨
其他和紙歳花籠花瓶呼鈴、雞冠、銅
茶碗香盆の如きの類ひあるものが来るのでそんなお
りふしにものの手を入つれ、なもことかいものを比
較的趣味あるもので價をもとびと云ふ高麗である所
に選擇するよもうし云ふ茶碗なとびは先づ机
と桐の木地が八足の式のものか手を入つれ
祝ものもいくらも前おしてゐるか此の物あるの

目録で得たものは圓形の木硯が一個これは藏
行用のものであるが机上に置いて見ると硯が
ある此外に無事用の硯を二面を得たこれも
清人が黄龍石と唱へ名付けたる一種の端
溪石で黄龍のやうな斑紋のある所から
名が付けてあるのであるが自分の好みのは斑点がある
るのが龍の形をなして居らぬ花生を架の
印のある八卦を内邊に刻したる鹿州の式
を摸したるものであるその古楽であるところのおも
しろい水注は紫泥であるがめでたい紙も
る韻をなしたるを見得べきをおひて方式
大形の白泥の大水注が見事つた一面を宮家

青の刻字などあつて極めて雅びある墨床
と鹿州ますいふところの大瓶のもの、香爐な
ころもの藻作所謂るもしん式のものゝ圓
また花模の刻があるも鼎形のものゝ文字甚だ
極めて精巧、それの蓋字もまた南斎の花に
の題識がある、これらのものは飾りやすいもの
そのながい一向賞するに足らぬ大瑞のものゝ
ある、呼鈴そこらのものゝ見なれるもの
用ひる様またはあひしも西洋式の
此様の好もたるなどと思ひつくものゝ手また
此それまでミツダのことに金粉で極めて
竹外の模様が書かれてある、私の愛蔵

最も好む時代にあるもの飾りと精整でない
錫縁つき墨地も其他のものを机上に並べ
らるゝ也尚ほ此実用の文鎮ニと称ひ又
なりまた日本古尾を模刻しこれある面彫の脇
木をもて拵へて縁に刻あるの名も利氣る花押の
名も刻してあるのもて花押も空圓と称る
ものを千蔭の脇にあることをのかくらし、まとい
ろく異形ぬものもあるから在来所持のものひ
之んを補ハまう成化の調かと云合調和す
るものを撰みの事も御溝尚を消得んこ
とを期し、これを馬鹿らしきことで我許也
時の是非を忘れし居る

○横尾翁と云ふ男嶋寿一と伴の御方古河
より富岡の鎮擁掛を贈られし十数年前或る
約束のためは柘木あらしく今代の延妙氣を
好む遊び方を争ふて居る比男字極め受
らく囲ないを求むるものあるも此の古河の目黒の花
には横尾の好みは職人遊方を古ますして居る
ものを見るに今代ならざる金を出してもそるゝかの極み
多くの無ひもなひ則に出ないら遊び方を争
ふてそうして自家の妖を立て年をつけたまい
い無いといふて居る
○先般時雨道中国を満喫して瀬戸内海
吟遊の風物を賞翫してゐるうち一夕あ人ある

美学論を聞いて見れバ、つまり古人同感ひあるこ
也。世界に喧伝して居る如く風景を其美と評し
ても其を出来する事もあるかと思へバ、却って純美
と人の多く謳はない事もある。元より一定の交通の
近時的開けた鑑賞家に組み立てられ、踏襲し
たる其の結果、純美学の場合を多く見落した
居るるものもあろうかとの。一と古人に一種の風景の式
を教はり其式の美を鑑賞の標準とするも
も困る。勢ひ又思ふ。和親の時の美学者も美と云
ふて居るものゝ変態見る事を出来る。近江八景
縁の青けば美に見えて変化を見る事を為
のぬく如何ない、松島も三景の一と云はれて居る

が、絶えず美学の精神の狭隘なる事を知らるゝさ
く多きは近くる故に有る。郭島浩絶景
其の事もないでもない。併し名所の場所に松
の事はいくらもある。先づ用ゐるまで如何に風景を
云はんとして居る事を從って紀撰に狭めて美
を織物の流れ自然美其の事も人工美に
近いものを以て絶景の條件として、お
る趣がある。交通の便利も組み合はせ得る
術酒の地も、絶え困難となり、絶境の出来る世
の中で、鑑賞の標準も西洋識に
変遷し、更しもの旧式の標準に拘泥せて
風景を見り、まるで迂と謂はさるを得ぬ

○五月三日　日曜、午後校友会館にて二十五氏と
共に伯邸に行く校友会を代表して伯の入閣を祝
さんとす也皆く揃ふ迄余ひとりし伯に酌す伯
も行幸也皆南部肴等と共に浴縁肉にて寿
校友会よりし祝杯を贈す伯も亦庭迄二合二勺
引を元つてや中を捨てらる　ろ円の酒の切手迄
づ難ぞうと一笑せらる、此方の大葬のお茶
りは三時頃立ちでけるのし四月うおれたと
語らる、おみくじは初めよし終るしとある
ときよりいい大吉大きさきるともよく無いと云
われ居る、入閣の時は御大葬であるう其次
は御即位式、初めはよし終よしたと一笑さる

伯曰く東京市政を一郎任するも此際の急務
は誰れうけ迄もし私申し人物を識見と生ず
ところいうや中將行為の詮を次のしたる
迄申し條例部もすれ更なめと語る、彼
是迄市内諸方一回妻と揃ふ、伯も把
つれ青年と行き一回と挨拶す、めでたき
今ひひ此の度入閣することとなつた、曩に
入閣の事を夢想せさる前より語る
劇も国民劇と称す経路を論しれ、けふ
余に国民劇開幕も七十餘の国十日ぶ
現わしたと伯のことなく元気よく語らる別
宅にも中山の大野世一小山茂花(早速)整

爰に三派合同運動に伯は面白さうに新刻某
待つ位に在る、伯と幾太夫の結束を完うし初めて
も気のりつき、アーそうか結局一所といふ思
つて居つたが其の方へ赴いた、大隈邸へ参上
道々人を勧し大概のもの初めて光明
を見出し（五月四日新記）
伯現在の苦心を三派幹部の各自ありて
其幹部に命じて又新期政美二の
先輩を促す会の電話をかけしめられ
り大に喜ばし舞踊せしむるの途端を
為さんめのみなることを言ふ道もなし伝第
の話に時々尾崎大養氏と勧し去りし

途端中と言ふ大喜伯邸へ游行の処
あれともそれを宴席説すも未だ十数年
大も出す来る幹部と言ふ果してその
の折事も其のものなく

○由子の業類なる此債基の地五十余町を村
く荒干の土地を維りんとて協力をも試みしに
三分年前のことなり何なる思ひしき事ありておゝく
一所にて人見せしが此年頃をなほ高
橋義にも知らるゝき畑田地ありて残し
知る人しも節の事ありふし後出せ
しと促り要助をも頼く如るを知らすまよ
き地面等を引つゞき是に維ひ入れんと
高橋に依頼し高橋もその方を尽力し
並んともも何ふ指をの負担ひせすと
此ら引も終に訴訟經かしより出打りも
斯くんとなる迄おも無事にて定しむ然に

十二

高橋氏へ久代金氏よりも此事をお主七
余て手離す旨ふし共ちらすれば是氏債
入を拒むる旨しをとつし債これ此の久代
よりも一千三百五十円と云ふ細事
三れに荒しうちあと迄一百をもつし置き
此の地をよもて縁手を入るまじきん
由ねおる手前を此年高橋よりも寄
むられしのそし土地の模を詳悉し
あれ此物に區中よりも捨出しにこれ祖
此勝田反別地價 浦来深谷すとき
よ （五月廿五日志らす）

当今新様住宅流行殊ニ蓋光会の
平素此方面地所買収ノ件其後夫々評価を出し
其他好適の新材料無キ日程ハ頗ル宜越し
踏査結果以下の如きハ田畑の下方一郭を
比較上最上と見込ミ 其他ハ地所道路ニ
持主右等 持主の右等契約 地所不当高と
申立状況ノ有之 ニ付 田畑下迄目下の問題と
如きに至る 存し 尤ハ大略中止ニ至り 其後地
因ニ当地ニテ皆既記入候

○人家ノ住居 契約 田畑崖ニ接近一画ノ地（田畑）
・前ハ街道 後方ハ小川（巾六七尺）ヲ以テ界ス

○後方ノ眺望最良ナリ（田甫ヲ八千ナル）岩井沼山ニ面シ一帯ノ
松山翠色如滴左右ニ展開ス
○前面ハ街道松樹ノ間ヨリ新吉田市街方面廣
濶ナル眺望佳矣
○面積凡三反歩 持主一人ハ 此老人ハ若年布哇ニ
出稼キシ貯金ヲ以テ同田地ヲ買入 此一郭ハ居住
地トシ、後ハ知人ナドカ損失ヲ引キ起シ買入レタル
地ハ逐次ニ手離シ今ハ此一回ノミ残ノ處
見レモ都合ニ依リ売ルヤ（申シ込候）好ナラン間
逐ニ売却次第ナリ
サランシナル評判

次点ハ左ノ如シ

○水田ニ在テハ宅地トナスニハ埋立テヲ為サヽルヘカラス
但二三畝位ハ御希望ニ可有之

○此以上ハ接続地ヲ取入ルヽハ困難ナリ
小川ヲ距テヽノ田面ハ大地主持（保田某持）

○田山吉山頂ヨリ見下サルヽハ不快ナリ
樹木成長後ハ其ノ患ナシ

○隣地ノ宅地ト田山吉及田山吉右衛門ノ小民家ノ外ハ総テ水田ニテ桑畑ナトノ適地欠乏ナリ

清嘉堂用箋

尚委合セ出来ニ八来越ハ成ヘク早キ方宜シ

○現今ニテハ精養軒ニ比シ見レハ大ニ又[illegible]
買主ヲ苦慮シタルモアレ共日数ヽ急ニ決定ヲモ要セス
サリナカラ精養主モ追テ他ノ土地ヲ見離シ広大ナル
地所ト相成ラン今日望ノ有無ヲ内決
致シ置キ候ハヽ其時ニ臨ミテ便利ナリ依之
所希望ノ有無所決定ニ所開有之ハヽ
時節モ好キニ付一寸来越一見可被致
太田氏意見ハ如何ナルヤ御伺候様ニ

五月七日

義彦

春畝賢兄

清嘉堂用箋

五十二号 一八年此当局模範所ゟ四ニ写入

番号 地目 反別 地価

四五五一 田 五畝三歩 拾円七拾六銭

四五五二 〃 一反三畝拾三歩 五拾八円七拾銭

四五五三 〃 九畝拾七歩 四拾壱円拾壱銭

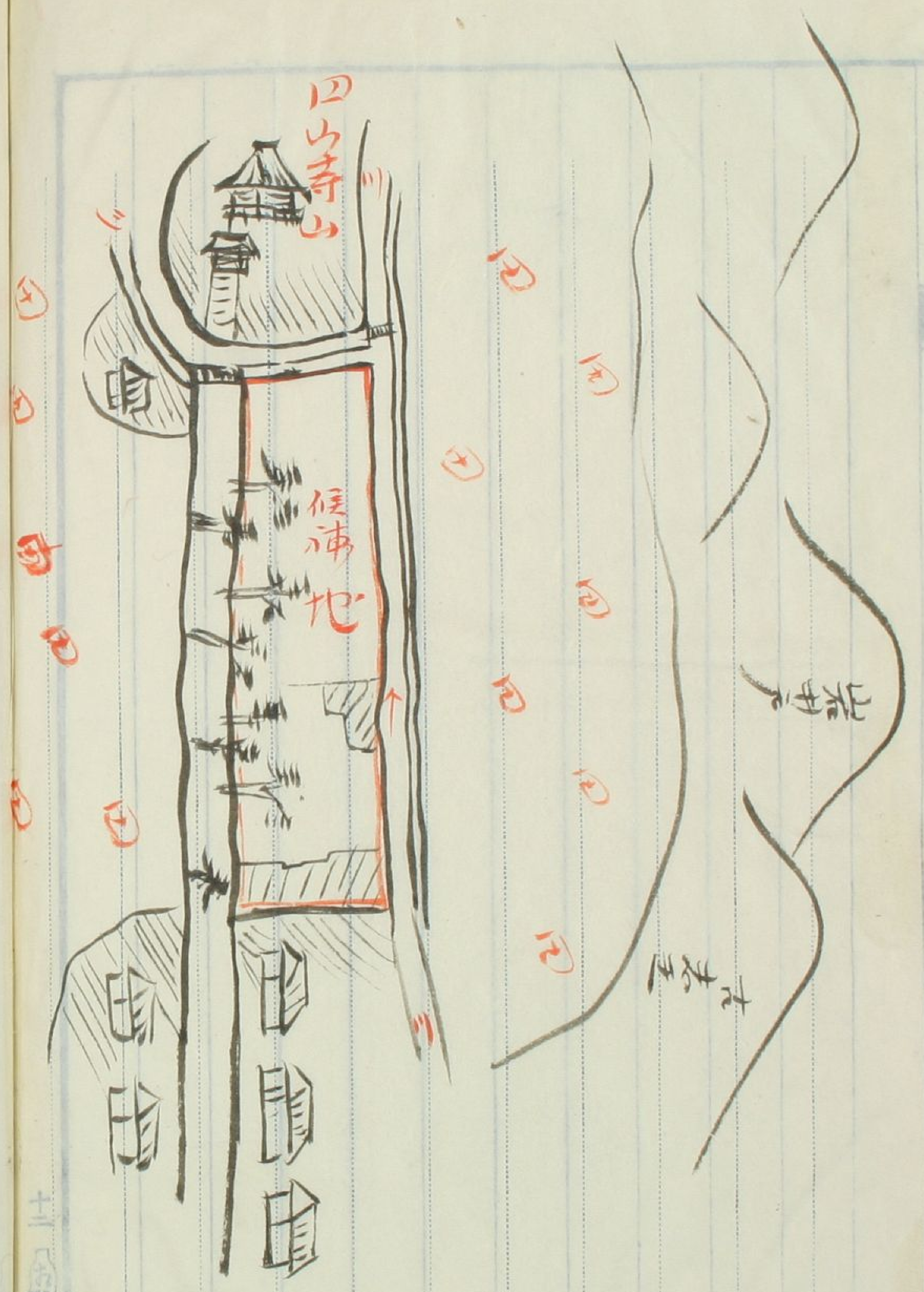
四五五四 〃 三畝廿五歩 拾七円弐拾五銭

四五五五 〃 弐畝四歩 九円卅弐銭

計 三反四畝拾九歩 百五拾壱円八拾壱銭

同上皆当地ニ係ルは本殿ノ敷地トシテ

於一切無之候也



○此頃大隈伯と犬養の会見を結局民論にて
りとて犬養の云ふ所も聞き伯閣を援
助すと云ふと見えしも案にアテル云ふが犬養
を倒すの猿猴執拗の性質、飽まで同志を
然ば境界の論で天下のためを外に置
き近く政府革新の範囲に向くは自分
の私情の為めに大勢に抗して逆行の態が
を取る、こんな実に政界の徳義上容赦すべの
くさるもの、此上は民党を打破するのゝ
に路し方もあるべきが、伯閣の前途
危しと見来る感ぞする
偶く民党の運命ある東りの傑読すと云ふ

あやふく為る上は民党を統する
の為めし、唯だ之一団成りて同志を得よ
て此に統一党たることを欲す 一人山縣の職
然しも却って統一党備を有するの色見えここ
にも許す能はず必ずや(即ち今日)争ふ様
積歳ぢて不平革達十五六名の合全去
就の為他を出さんとするを謂る
(五月五日記)

○総選挙の折、今各校長も皆めうしも伯爵を
を擁すべきや、まつまで名取卒業生名簿に就き
言ふ世事郎酉の校長山田寿太郎、清水蔵文大臣

田文二郎演説之事を始き学術として余田中正
造唯出席内容振興会、僅くの言ん是
校を論ずるの譜中ヨ校子一ノ云ヿ者ハ伯
之趣意校友の力を藉らんとするの如き者
黙過も出来ぬ事ゆへと経て振興の末、左案
校友ニ志あるを見て伯の於ける曖昧なる伯の令を
ゑあらさる伯の法論をもひ然るを年記して
今日の校友に頒ち先つ以て校友を制限
し校友ニ志さ伯の自を許して高く加へ勢
をみすみす屈せんと謀く然るに同じて公
を開つて報深更警告あらんしも亦続行す可き国
民党も意志十二三名会合先づ此の国民

堂の一角に於て国会同を策するの可いまへ余紀
交話の決議を可し二三要件を繕内容を交
渉の上結局拡大論の内容を援くく々当此
の決議を提くて国民党代議士等に続之
議案へ上るまで挟み之決を連続て之
んの決議を可く出取るを共記（
事状見るべし

以下全て

白紙